

第2章

日本青年韓国派遣

行 動 地 図

行 動 記 録

訪 問 先 等 一 覧

団 長 報 告

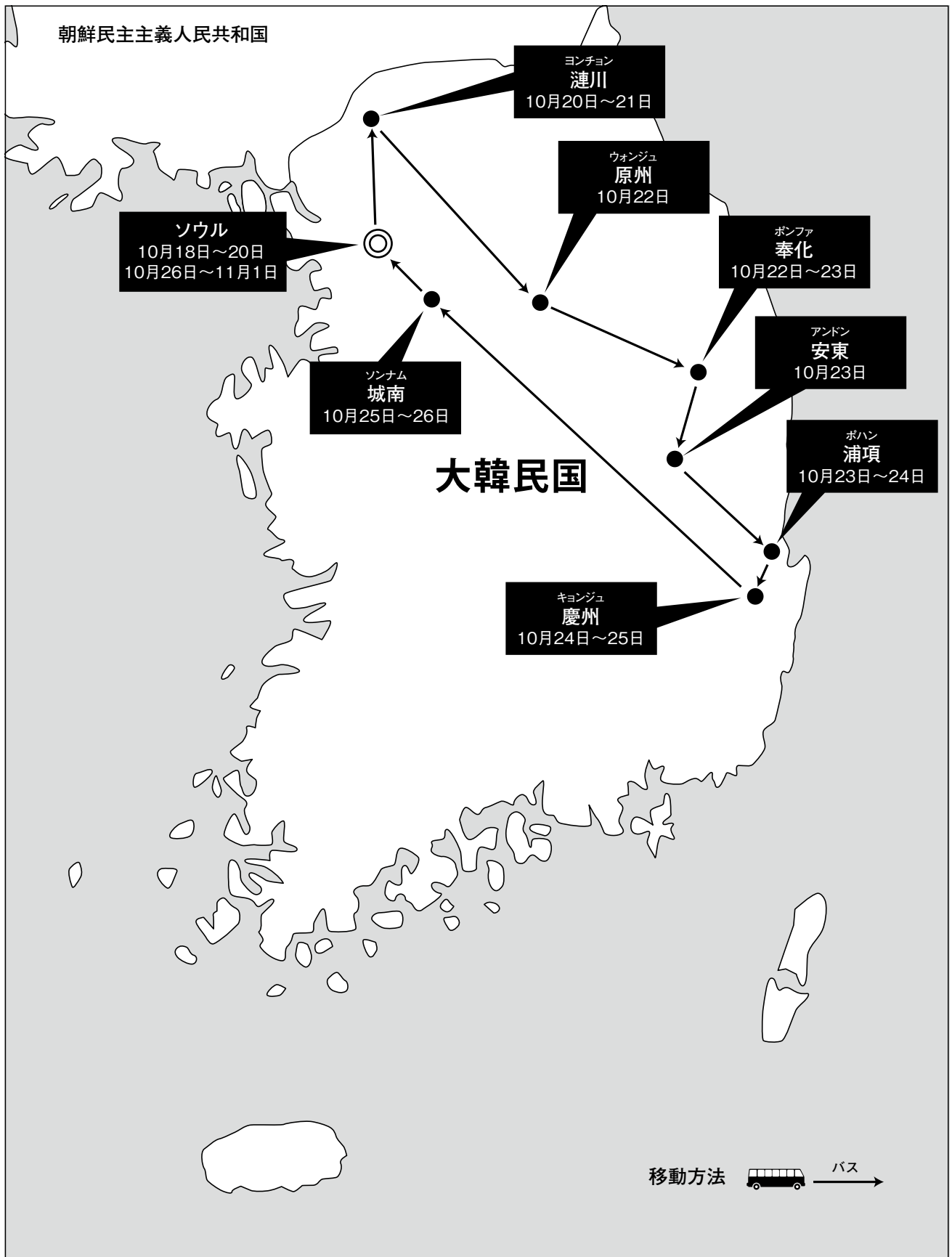
参 加 青 年 代 表 報 告

デ ィ ス カ ッ シ ョ ン 成 果



行動地図

令和5年度 日本青年韓国派遣



行動記録

令和5年度 日本青年韓国派遣

	月日	時間	行動日程	滞在都市
1	10月18日 (水)	12:05 14:30 15:45-16:45 16:45-17:20 17:20-18:30 18:40-19:35 19:40	東京(羽田)発(NH863) ソウル(金浦)到着 移動(空港→ホテル) チェックイン オリエンテーション 夕食 ホテル着	東京 ソウル ↓
2	10月19日 (木)	10:40-12:00 12:10-13:00 13:30-14:35 15:00-16:30 17:00-18:00 18:30	女性家族部表敬訪問 歓迎昼食会 大韓民国歴史博物館訪問 在大韓民国日本国大使館表敬訪問 夕食 ホテル着	↓
3	10月20日 (金)	10:10-11:15 12:00-13:00 13:00-14:30 14:30-16:10 17:30-18:30 19:30	国立民俗博物館訪問 昼食 移動(ソウル→漣川) 韓半島統一未来センター訪問 ・センター紹介及び見学 ・統一未来体験活動 夕食 ホテル着、チェックイン	漣川(ヨンチョン) ↓
4	10月21日 (土)	10:00-19:00 19:00-20:40 20:40	漣川郡青少年修練館訪問及び交流会 ・歓迎式、アイスブレイク、両国の文化紹介 ・全谷先史博物館視察 ・昼食 ・韓屋カフェ視察 ・才人の滝視察 ・コチュジャン作り体験 ・夕食 移動(漣川→ソウル) ホテル着	↓ ソウル
5	10月22日 (日)	9:00-11:10 11:10-12:15 12:15-14:00 14:00-16:00 16:00-17:45 17:50-19:00 19:00	移動(ソウル→原州) ミュージアムSAN訪問 原州市内移動及び昼食 移動(原州→奉化) 国立白頭大幹生態樹木園訪問 夕食 宿泊施設着	原州(ウォンジュ) ↓ 奉化(ボンファ)
6	10月23日 (月)	10:00-13:15 13:15-14:45 14:45-17:00 17:00-19:00 19:00-19:45 20:00	国立青少年未来環境センター表敬訪問 ・歓迎式 ・施設見学 ・体験活動 ・昼食 移動(奉化→安東) 河回村訪問 移動(安東→浦項) 夕食 ホテル着	↓ 安東(アンドン) ↓ 浦項(ポハン) ↓

	月日	時間	行動日程	滞在都市
7	10月24日 (火)	10:00-17:30 17:30-18:40 18:40-19:30 19:40	浦項市青少年修練館訪問及び交流会 ・自己紹介及びアイスブレイク ・昼食 ・ロボット融合研究院視察及びロボット作り体験 ・浦項製鉄所 (POSCO) 視察 ・記念撮影 移動 (浦項→慶州) 夕食 ホテル着	浦項 (ポハン) ↓ 慶州 (キョンジュ)
8	10月25日 (水)	10:30-11:30 11:40-12:50 13:10-14:30 14:30-16:10 16:10-20:30 20:30	石窟庵訪問 昼食 仏国寺訪問 大陵苑訪問 移動 (慶州→城南)及び夕食 ホテル着	↓ 城南 (ソンナム)
9	10月26日 (木)	9:40-11:50 12:00-13:00 13:00-13:50 13:50-16:00 16:30-17:30 18:00-19:00 19:30	韓国ジョブワールド訪問 昼食 移動 (城南→ソウル) 区立瑞草ユースセンター訪問 KBS ON訪問 夕食 ホテル着	↓ ソウル
10	10月27日 (金)	11:00-12:00 12:00-13:00 13:00-14:50 15:00-16:00 16:00-17:50 18:00-19:00 19:00-20:00 20:00-21:00	<日韓青少年交流会> ・オリエンテーション ・開会式 昼食 レクリエーション チェックイン 文化交流のタペリハーサル 夕食 文化交流のタペ 交流会	
11	10月28日 (土)	9:00- 9:30 9:30-12:00 12:00-13:00 13:00-14:30 14:40-15:50 15:50-16:00 16:00-17:45 17:45-18:40 18:40-19:00 19:30	討論会オリエンテーション 討論会1部 テーマ1：教育 テーマ2：労働 テーマ3：デジタル テーマ4：メディア テーマ5：社会 昼食 討論会2部 討論会発表 休憩 共同体活動 グループ別夕食 閉会式 ホテル着	
12	10月29日 (日)	12:30-13:30 13:30-16:10 17:00-18:40 18:50-20:00 20:30	昼食 景福宮観覧及び韓服体験 公演『ペインターズ』鑑賞 夕食 ホテル着	↓

	月日	時間	行動日程	滞在都市
13	10月30日 (月)	11:00-12:30 13:00-14:00 15:00-17:30 18:00-19:00 19:00-19:20	国立中央博物館訪問 昼食 韓国外国語大校訪問及び交流会 ・韓国紹介及び日韓関係に関する講義 ・在学生との交流会 夕食 ホテル着	ソウル ↓
14	10月31日 (火)	10:30-17:00 17:00-18:30 20:00	ソウル自由都市ツアー ・オリエンテーション ・自由都市ツアー 歓送晚餐及び評価会議 ホテル着	↓
15	11月1日 (水)	9:10- 9:50 12:25 14:20	移動(ホテル→空港) ソウル(金浦)発(NH864) 東京(羽田)着	↓ 東京

訪 問 先 等 一 覧

令和5年度 日本青年韓国派遣

10月19日

訪問先	女性家族部
訪問先都市	ソウル
面 会 者	イン・ジョンスク (In Jeong Suk) 青少年活動振興課 課長 オ・ドンフン (Oh Dong Hoon) 青少年活動振興課 事務官 ナ・テジュン (Na Tae Jun) 令和5年度韓国青年招へい団 団長 イ・ダミ (Lee Da Mi) 令和5年度韓国青年招へい団 副団長
コ メ ント	女性家族部は、女性の社会的・経済的地位向上、家族関係の健全性、性別に基づく差別の解消などを促進するために活動している国家行政機関である。青年の就労支援やひとり親家庭の経済支援など、女性家族部が行っている具体的な政策について説明していただき、質疑応答及び記念撮影を行った。

訪問先	大韓民国歴史博物館
訪問先都市	ソウル
面 会 者	ハ・ミンヘ (Ha Min Hye) 氏
コ メ ント	大韓民国歴史博物館は、大韓民国の誕生と発展に関する資料を展示する近現代史に特化した博物館である。近代的な国づくりを模索した時期から、国民国家の新たな境地について問うようになった今日までの韓国近現代史に関する展示がされている。ガイドによる説明のもと、朝鮮戦争や韓国独立に関する歴史について深く学ぶことができた。

訪問先	在大韓民国日本国大使館
訪問先都市	ソウル
面 会 者	山本剛 一等書記官 アン・デヒョン (An Dae Hyun) 副調査官
コ メ ント	在大韓民国日本国大使館を表敬訪問した。在大韓民国日本国大使館公報文化院の山本剛一等書記官に講演いただき、大使館職員の仕事や日韓関係について学ぶことができた。団員は積極的に質問をし、日韓関係をより良いものにしていくために私たちにできることは何か深く考えるきっかけとなった。

10月20日

訪問先	国立民俗博物館
訪問先都市	ソウル
コメント	国立民俗博物館は、韓国の伝統的な生活様式等、民俗に関連する資料を展示している博物館である。韓国人の日常や生涯における生活が展示されており、今日まで形を変えながらも伝承された韓国文化について深く学ぶことができた。また、韓国の儀式や祭事について、韓国独自の様式や日本との違いを学ぶきっかけとなった。

訪問先	韓半島統一未来センター
訪問先都市	漣川
面会者	イ・ヨング (Lee Yong Gu) 氏
コメント	韓半島統一未来センターは、統一された朝鮮半島の未来を体験できる施設であり、韓国の統一部が管理している。施設内には南北統一の必要性を感じることでできる様々なプログラムや体験ブースがあり、今回は、タイムトラベルをコンセプトにした高速鉄道「KTX統一号」に乗って過去から未来を行き来するVRを体験した。その後、文化、観光、物流、資源をテーマにした四つのブースで様々な展示を見て、朝鮮半島統一が実現した世界を思い描くことができた。

10月21日

訪問先	漣川郡青少年修練館
訪問先都市	漣川
面会者	シン・ミョンチョル (Sin Myeong Cheol) 館長
コメント	漣川郡青少年修練館では、地元高校生等との交流会が行われた。日韓両国の文化を互いに紹介し、友好を深めた。日本に関心があったり、日本語を話せたりする高校生がおり、短い時間であったが楽しい時間を過ごすことができた。

訪問先	全谷先史博物館
訪問先都市	漣川
コメント	全谷先史博物館は、東アジアにおいて初めてハンドアックスが発掘された全谷里遺跡の場所に建てられ、先史時代をテーマにしている。先史時代や遺跡に関するレクチャーを受けた後、施設内を見学した。ハンドアックスに触れたり、原始人の等身大復元模型や竪穴式住居の再現展示などを見たりすることができた。

プログラム	コチュジャン作り体験
訪問先都市	漣川
コメント	漣川修練館で交流した高校生と共に韓国の発酵調味料であるコチュジャン作りを体験した。粉唐辛子やメジュ（麴に似た大豆発酵食品）等を混ぜるなどして、コチュジャンの製造過程を知ることができた。完成後、高校生たちと夕食を共にし、漣川での最後のひと時を楽しんだ。

10月22日

訪問先	ミュージアムSAN
訪問先都市	原州
コメント	平成25年（2013年）に開館したミュージアムSANは、日本の著名な建築家である安藤忠雄氏が設計したミュージアムで、紙とアナログの芸術をテーマにしている。本館は四つの展示室が四角形、三角形、円形の空間で連結され、大地と空を人をつなぐという安藤氏の哲学が込められている。博物館ゾーンでは紙に関する常設展示を観覧し、紙の価値について再発見することができた。美術館ゾーンではちょうど安藤氏に関する企画展が開催されており、同じ日本人として海外でも注目される安藤氏を誇りに思った。
訪問先	国立白頭大幹生態樹木園
訪問先都市	奉化
コメント	朝鮮半島を縦断し、生態系の宝庫である山脈「白頭大幹（ペクトウテガン）」の中心に位置するアジア最大規模の樹木園である。敷地内にある種子保管施設「シードボルト」は、世界に2か所しかない植物の絶滅を防ぐことを目的にした施設で、主に朝鮮半島の野生植物の種子が保管されている。他にも、トラの保護施設を見学したり、野生草花園を散策したりして、朝鮮半島の生態系について学ぶことができた。

10月23日

訪問先	国立青少年未来環境センター
訪問先都市	奉化
面会者	ハン・シンヒ（Han Shin Hee）環境活動部 部長
コメント	国立青少年未来環境センターは、地球環境や経済社会問題、人類の普遍的な問題等について持続可能な成長ができるように国が設立し、韓国青少年活動振興院が運営する施設である。施設内を見学した後、エコバック作りを体験した。エコバックにはオリジナルの絵や写真を印刷することができ、思い思いにデザインをして楽しむことができた。
訪問先	河回村
訪問先都市	安東
面会者	ファン・ヒョヌ（Hwang Hyeo Nu）文化観光解説士
コメント	河回村は安東市にある集落で、村全体が韓国の重要民俗文化財第122号に指定され、慶州市の良洞村とともにユネスコの世界遺産にも登録されている。16世紀に村ができた後、住民は代々同じ血縁集団で形成され、現在も先祖から受け継がれ儀礼や伝統的家屋等を守り暮らし、韓国国内において最も歴史的価値が高いとされている。

10月24日

訪問先	浦項市青少年修練館
訪問先都市	浦項
面会者	パク・シヒョン (Park Si Hyeon) 館長
コメント	浦項市青少年修練館は、想像的未来人材を育成するための青少年活動支援施設であり、ここでは地元の青少年等との交流会が行われた。交流会に際して期待と緊張が半々だったが、ゲーム形式のアイスブレイクを行うと、すぐに打ち解けることができた。また、韓国側から浦項市青少年修練館の青少年による自主的に運営するイベント等の活動紹介があり、多くの学びがあった。

訪問先	ロボット融合研究院
訪問先都市	浦項
面会者	カン・スジョン (Kang Su Jeong) 氏
コメント	ロボット融合研究院は、国内唯一の政府傘下のロボット専門生産研究所であり、企業と連携した研究開発に取り組んでいる。浦項市青少年修練館の青少年と共に訪問し、実際に社会で活用されているものから、開発中のものまで多数のロボットに関する説明を聞いた。また、実際にロボット作りを体験することができ、ロボットに対してより身近で親しみやすい印象を持つようになった。

訪問先	浦項製鉄所 (POSCO)
訪問先都市	浦項
面会者	イ・ヒョンミン氏
コメント	韓国最大の製鉄会社を訪問し、敷地内をバスで移動しながら、概要説明を受けた。鉄鋼産業の発展の歴史は、韓国の飛躍的な経済発展期と重なっており、浦項製鉄所は浦項のみならず、韓国全体の産業の発展にも寄与した。工場の中を見学することができ、鉄の製造過程について理解を深めることもできた。

10月25日

訪問先	石窟庵及び仏国寺
訪問先都市	慶州
コメント	ユネスコの世界遺産に登録されている仏教寺院である。この寺院がある慶州は、朝鮮半島を統一した最初の国家である新羅の都が置かれた場所で、多くの史跡や文化財が集まっている。石窟庵は、切り出した花崗岩をドーム状に積み上げて人工的に造られた石窟寺院で、その建造技術は類まれなものである。仏国寺は韓国を代表する仏教寺院として知られ、七つの国宝を始めとする統一新羅時代の貴重な仏教美術品を見ることができる。紅葉が始まった境内を散策し、1,000年以上前に思いを馳せる貴重な時間となった。

訪問先	大陵苑
訪問先都市	慶州
コメント	大陵苑は、新羅の王や貴族のものと言われる大規模な古墳群である。慶州で最も規模の大きい古墳である皇南大塚、天馬図という天馬が描かれた馬具のあおり（泥よけ）が出土した天馬塚など、23基の様々な規模の古墳が集まっている。天馬塚からは他にも金冠など1万点以上が出土し、現在は国立慶州博物館に所蔵されている。天馬塚内部では埋葬時の再現展示を見ることができ、出土した金冠の中でも最大のものはとても華麗で、息をのむばかりであった。

10月26日

訪問先	韓国ジョブワールド
訪問先都市	城南
面会者	キム・スジョン（Kim Su Jung）氏
コメント	韓国ジョブワールドは、青少年が多様な体験を通じて、より具体的な進路選択ができるよう設立された国立の職業体験館である。年代別にゾーンが分けられ、適正に合った職業を探したり、職業体験したりすることができる。こども体験館は、小さい子供でも楽しむことのできるテーマパークのような雰囲気の中で職業体験ができるようになっており、進路選択の幅が広がるとともに、働くことについての理解も深められると感じた。

訪問先	区立瑞草ユースセンター
訪問先都市	ソウル
面会者	パク・ジュホン（Park Joo Hon）氏
コメント	スマート機器やマルチバースを活用した多様なプログラムを提供しているソウル市瑞草区立の青少年施設である。施設内では、青少年期に必要な器量と品性を育み、健康に成長できるよう体験の機会を提供している。能力を強化することができるとともに、青少年が地域社会で活躍する機会を提供する役割も担っている施設であった。

10月26日

訪問先	KBS ON
訪問先都市	ソウル
コメント	KBS ONは、韓国の公共放送局であるKBSが運営する見学施設で、テレビやラジオの放送の歴史や仕組みを知ることができる。ラジオのオープンスタジオやミニ博物館、ニュース体験、テレビスタジオ、ホログラム、立体映像体験、音声吹込み、放送制作等、様々な体験ができた。普段私たちが視聴しているテレビやラジオの裏側を実際に体験し、興味深かった。

10月27日-28日

プログラム	日韓青少年交流会
訪問先都市	ソウル
面会者	オ・ドンフン (Oh Dong Hun) 女性家族部 事務官 イ・ウンスク (Lee Eun Sook) 韓国青少年活動振興院 交流協力部長 キム・ボリム (Kim Bo Rim) 韓国青少年活動振興院 交流協力部 課長 ファン・スヨン (Hwang Soo Yeon) 韓国青少年活動振興院 交流協力部 課長補佐 ナ・テジュン (Na Tae Jun) 令和5年度韓国青年代表団 団長 イ・ダミ (Lee Da Mi) 令和5年度韓国青年代表団 副団長
コメント	1泊2日で令和5年度韓国青年代表団との交流会を行った。1日目はまず両国の青年でグループを作り、ゲームを通じて交流を図った。その後「文化交流の夕べ」では、各団が準備してきた歌やダンスのパフォーマンス等を披露し、互いの文化への理解を深める時間となった。2日目は五つの班に分かれたディスカッションを行い、様々なバックグラウンドを持つ青年同士の議論によって、視野を広げるきっかけとなった。短い時間ではあったが寝食を共にすることで、親睦を深めるだけでなく、対話する中で互いに刺激し合う関係を築くことができた。

10月29日

プログラム	景福宮観覧及び韓服体験
訪問先都市	ソウル
コメント	景福宮は、朝鮮王朝の王宮として建てられた韓国最大規模の建造物である。敷地内には国宝を始めとする文化財が数多くあり、造形美や四季によって変わる景色も高く評価されている。韓服を着た観光客が多く訪れており、同じように着替えて自由観覧を楽しんだ。天候や時期にも恵まれ、美しい紅葉の下を散策することができ、趣を感じた。
プログラム	公演『ペインターズ』
訪問先都市	ソウル
コメント	『ペインターズ』は韓国発のライブドローイングパフォーマンス。言葉を発しないパフォーマンスで、言葉が分からなくても楽しむことができる。その場で描かれる水やライトを使ったアート作品は見る人を魅了し、会場は大きな拍手と歓声に包まれていた。

10月30日

訪問先	国立中央博物館
訪問先都市	ソウル
面会者	ソン・ウンミ (Son Eun Mi) 氏
コメント	国立中央博物館は時代やカテゴリーによって六つに分けられた常設展示を中心に観覧した。高句麗、百濟、新羅などの1,000年以上前の時代に作られた陶磁器や、墓から発掘された純金の装飾品などが印象に強く残った。一つ一つが当時の人々の願いや迷信などを基に作られていることや、現代の芸術家に影響を与えている作品が多くあることを学んだ。貴重な展示物を前に刺激のある時間であった。

訪問先	韓国外国語大学校
訪問先都市	ソウル
面会者	キム・ドンギョ (Kim Dong Kyu) 日本語大学日本語文化学部 学部長 ムン・チャンハク (Moon Chang Hak) 日本語大学日本語文化学部 副教授
コメント	韓国外国語大学校では、日本語学科の教授から「韓国語と日本語の挨拶行動」というテーマで講義をしていただいた。教授の実体験などを交えた日本語の挨拶と韓国語の挨拶 (インサ) の違いに関する講義は非常に興味深く、コミュニケーションスタイルは言語や社会、価値観などによって異なることを学ぶことができた。また、講義後には日本語を勉強している韓国の学生たちとも交流し、互いの似ているようで似ていない言語の違いを知り、相互理解を深めることができた。

10月31日

プログラム	ソウル自由都市ツアー
訪問先都市	ソウル
コメント	令和5年度韓国青年代表団の青年たちが、事前に企画してくれたツアーを四つのグループに分かれて行った。ロッテタワーにのぼってソウルを一望するコース、若者に人気の街である弘大 (ホンデ) でフォトブースなどを体験するコース、漢江でピクニックを楽しむコース、調香体験等伝統文化を感じられるコースなど、それぞれのグループが韓国での最後の日程を楽しんだ。半日という短い時間ではあったものの、韓国青年たちと更に強い絆で結ばれることができたように感じる時間であった。

団 長 報 告

令和5年度 日本青年韓国派遣

伊藤 慶矢

●はじめに

日本・韓国青年親善交流事業は、昭和59年（1984年）の日韓首脳会談における共同声明の趣旨を踏まえて昭和62年（1987年）から両国政府の共同事業として開始された歴史ある事業であり、日本及び韓国の青年が相互に相手国を訪問し、施設訪問や文化交流、ホームステイ、青年同士のディスカッション等の活動を通じて、両国青年の友好と相互理解を深め、国際的視野をもった、次世代の国際社会を担う青年の育成を図ることを目的として実施するものである。

新型コロナウイルス感染症の世界的な流行のため、令和元年（2019年）を最後に対面での交流は中断されていたが、今年度、4年ぶりに対面交流の復活が叶うこととなった。その記念すべき第34回目の派遣団の団長に自分が任せられることとなり、そのことを非常に光栄に思うと同時に、歴代の団長に比して圧倒的に若く経験値が足りない中で、本当にこの大役を全うすることができるかという不安も覚えながら、来る韓国派遣に向けて準備を進めることとなった。

●事前研修にて

オンラインでの面接選考等を経て決定された韓国派遣団25名が初めて顔を合わせたのは、7月5日から8日に国立オリンピック記念青少年総合センターで行われた事前研修でのことだった。事前研修は国際社会青年育成事業と合同で実施されたが、冒頭、団長・副団長・渉外と団員全員が一堂に会する形で実施された開講式は思っていた以上に緊張感があり、日本政府の代表団として派遣されるのだということを強く感じさせるものだった。

事前研修では、工夫を凝らしたアイスブレイクを皮切りに、日韓関係の歴史やディスカッションに関する講義等、訪問に向けたインプットを行ったほか、派遣団としての団目標（スローガン）や、総務係、記録係、写真係、ディスカッション係、日本紹介係といった派遣団内の役割分担等についての団としての基本事項の決定を行った。今年度は例年と異なり、あえてユースリーダーという青年の代表の役職は設けず、25名の団員たちの中で自発的に合意形成をしてもらう形をとった。最初のうちは、副団長がリードする形で議論を進めようとしていたが、皆が様子見しながら近くの団員と話し合うだけ

で、団としての意見をまとめていくという流れがなかなか生まれず、やや歯がゆい思いで様子を見ていた。しかし、団研修を重ねる中で、だんだんと具体的な意見を表明する団員が出始め、それを団としてどのように決めていくか自発的に提案をする者も出るようになり、最後には、副団長のリードなしに、団員たちだけで合意形成を行うことができるようになっていた。特定の一人が皆を引っ張るという形ではなく、場面に応じてリードする者が変わりながら、団員それぞれが必要な意見を言い合っ物事を決める形となったのが非常に良かったと思う。合意形成の難しさを肌で感じ、どうしたら良いかを団員全員がそれぞれ考えながら、団として試行錯誤したからこそたどり着いた結果なのではないかと感じた。

そうした生みの苦しみの中で決まった団目標が、「未来のかけ橋になろう！笑顔で斗い팅（ファイティン）」だ。新型コロナウイルス感染症の世界的流行で一時途絶えていた日韓の対面での交流が復活する今回をリスタートの回として位置付け、コロナ禍で閉塞した状況から共に立ち上がろう、未来の日韓両国のかけ橋となれるよう積極的かつ濃密な交流をしようという団の皆の思いがこの団目標に集約されている。

合宿形式での研修の後は、2週にわたりオンラインでの事前研修が行われた。韓国人留学生とのディスカッションや本事業のOB・OGとの交流会、団研修等、オンラインの特徴を生かしたプログラムを実施し、派遣に向けた自主的な準備に弾みをつける形となった。

●いざ韓国へ

韓国派遣直前の出発前研修で3か月ぶりに再会した30名の団員は、事前研修の時点よりもさらに仲が深まり、団結力が強まったように見えた。オンラインでの事前研修の後も、様々な係ごとの準備等を通じて団員同士で連携する機会が多くあり、そうした中で一層打ち解けることができたのではないと思う。特に今年度は、初めての試みとして、青年たちの有志で、韓国青年代表団と二度にわたってオンラインでの交流を行った。日程の調整から実施の方法、交流の内容に至るまで、一から仲間同士で話し合い、韓国の青年たちと調整を行ったことは、大いに団員たちの糧になったものと思う。

駐日本国大韓民国大使館から政務公使をお迎えして実施した壮行会では、事前研修の開講式以来の緊張感の

中で代表青年の決意表明がなされ、日本政府の代表として韓国に向かうことを改めて意識し、背筋が伸びる思いだった。また、壮行会には団員のご家族も数名参加されていたが、団長として皆様と御挨拶する中で、団員全員が無事にプログラムを終え、元気に日本に戻って来られるよう、団長としての責任を全うしなければならないとの思いを強くした。



壮行会での記念写真

出発日は、朝、国立オリンピック記念青少年総合センターからバスで羽田空港に向かい、本事業のスタッフの皆さんと記念写真を撮影した上で、皆で飛行機に乗り込んだ。ついに派遣が始まるのだと緊張半分高揚半分で胸を高鳴らせながら羽田空港を飛び立ったのだが、映画を一本も見終わらないうちに金浦空港に到着することとなった。金浦空港では、15日間のプログラムに同行してくださるコーディネーターと通訳の方々が盛大に出迎えてくださり、滞在先のホテルに移動してプログラムのオリエンテーションを受けた。その夜に皆で食べた豚足（チョッパル）の味は忘れられない。

●女性家族部への表敬

訪韓2日目には、韓国政府の女性家族部にて表敬を行った。青少年活動振興課のイン・ジョンスク課長はとても気さくな方で、韓国での団長としての初めての挨拶とギフト交換にやや緊張気味だった私は内心ほっとしていた。そして、日本でお会いした際に、ソウルでお会いしましょうと約束をしていた、韓国青年代表団のナ・テジュン団長、イ・ダミ副団長もその場に同席して下さっており、感慨もひとしおであった。それぞれの代表挨拶の後、韓国側から、女性家族部で実施している青少年育成施策等についての説明を受けたが、そうした緊張感が残る雰囲気の中でも、その説明に対し、団員たちはしっかりと自分なりの問題意識を持って質問を投げかけており、思いがけず頼もしさを感じるようになった。

歓迎昼食会では、イン・ジョンスク課長と並んで豪華な韓定食を頂きながら、仕事のことからプライベートのことまで色々お話しすることができた。翻訳アプリのPapago様様である。歓迎昼食会の会場は、各国の閣僚級をもてなす際に使用する部屋を用意して下さったと

のことで、歓迎の心遣いを切に感じながら女性家族部を後にした。



女性家族部での表敬の様子

●施設等訪問

韓国滞在期間中は、ソウルだけでなく、漣川（ヨンチョン）、原州（ウォンジュ）、奉化（ボンファ）、安東（アンドン）、浦項（ポハン）、慶州（キョンジュ）、城南（ソンナム）と半島の北から南まで様々な都市を回り、特色あふれる様々な施設や史跡等を訪問する機会に恵まれた。韓国渡航経験の豊富な渉外のお二人も行ったことがないような、観光ではなかなか訪れる機会がない地域にも足を運ぶことができ、非常に良い経験となった。

軍事境界線に程近い漣川では、車で数十分もかからない場所に軍が駐在しているという独特な雰囲気を感じながら、韓半島統一未来センターを訪れた。独立当初の境界線である38度線の上に建つ当該施設は、「分断国家」としての韓国を改めて認識させられるものだった。また、エリザベス2世も訪れたという、500年前の李氏朝鮮時代の両班（ヤンバン）の伝統的な家屋・生活様式を守って生活している安東の河回村（ハフエマウル）は、周囲を山と川に囲まれ、近代的な建物が全く視界に入らない特殊な環境であり、村の中を歩いていると全く別の時空に迷い込んでしまったかのような感覚に襲われたのが印象的だった。気のせいかな、太陽がいつもより大きく、力強く感じた。



河回村訪問の様子

このほか、ソウルにおいても、韓国の伝統的な衣装である韓服を着て景福宮を見学したり、KBSでテレビ局の裏側を見学し様々な体験活動を行ったり、韓国外国語大学校にて日本語を学ぶ学生と交流したりと、非常に多様なプログラムが用意されており、毎食の豪華でボリュームミーな食事とあいまって、韓国滞在期間中は、非常に充実した日々を送ることができたように思う。

●韓国青年との交流

15日間の滞在期間の中で団員たちの目が最も輝いていたのは、やはり韓国の青年たちとの交流の場面だったように思う。

漣川、浦項では、地域の青年たちと共に、地域の青少年育成施設である「青少年修練館」を起点として各地の特色ある施設等を訪問した。漣川では、青少年修練館でアイスブレイクを行った上で、東アジアで初めてハンドアックスが発見された全谷里遺跡の先史博物館を見学し、伝統的な建物である韓屋を活用した人気のカフェでシッケという韓国風の甘酒を味わうとともに、エプロンと三角巾の完全装備で皆でコチュジャン作り体験を行うなどした。浦項では、青少年修練館でチーム対抗のクイズ大会でアイスブレイクを行った上で、ロボット融合研究院にて最新のロボットの紹介や操作体験、簡易ロボットの組み立て体験を行うとともに、韓国最大の製鉄会社であるPOSCOの製鉄所内を見学するなどした。それぞれ1日ずつという短期間の日程ながら、交流会を綿密に準備してくださった実行委員の皆さんや地域の青年たちの協力のおかげで、非常に中身の濃い交流を行うことができたように思う。ただ、もし叶うのであれば、夜を挟んでもう1日、交流する時間があると更にもう一段階深い交流ができたのではないかという感触を覚えたので、来年度以降、是非そうしたプログラムの仕立てになることを期待したい。

そして、ソウルでは、本事業の韓国青年代表団の団員たちと1泊2日で交流する「日韓青少年交流会」が行われた。韓国の伝統的な遊びをテーマにチーム対抗で大いに盛り上がったアイスブレイクと、両国の青年がみっちり30分ずつ、ダンスや歌のパフォーマンスも交えて文化紹介を行った1日目、五つのテーマに分かれて両国の社会環境の違いも踏まえながら熱くディスカッションを行い、最後まで別れを惜しんだ2日目と、短いながらも非常に濃密だったこの交流会は、このプログラムのハイライトと言っても過言ではない。夜は日本青年と韓国青年が同室に泊まり、時間の制約を感じることなく大いに交流を深めることができたのではないかと思う。かくいう私も、副団長、渉外の皆さんと共に、文化交流でダンスパフォーマンスを披露するなど大いに楽しませていただいたが、後で聞いたところでは、団長団がパフォーマンスに参加するのはあまり例がないとのことであり、まだ年若い自分だからこそできたことなのではないかなと

思うなどした。2日間の交流を終え、日本青年団が会場を後にする際には、出発予定時刻を過ぎても両国の青年同士で思い思いに別れを惜しみ合う姿があらゆるところで見られ、彼らにとってのこの2日間がいかに濃く充実したものだったのかを実感することとなった。

韓国青年代表団の団員たちとは、プログラム最終日に、四つのグループに分かれてソウル各地の名所を回る「自由都市ツアー」で再会することとなった。韓国青年たちがそれぞれ日本青年を案内するツアーを企画し、引率者の監視の目を離れ、まさに自由に交流を深めることができる人気のプログラムである。続いて行われた夕食歓送会でも楽しく夕食を囲んだ両国の青年は、さらに大きく距離を縮めることができていたように思う。その夜の最後の別れの場面は、これぞ国際交流の醍醐味だと感じるような、温かく非常に感慨深いものだった。



日韓青少年交流会でのディスカッションの様子



日韓青少年交流会での記念写真

●おわりに

韓国での長い滞在を終え、羽田空港でスタッフの皆さんの出迎えを受けたとき、誰一人欠けることなく、プログラムを無事に終えることができたことに深い安堵を感じたことをよく覚えている。そして、帰国後研修の最後、本プログラムの振り返りの場面では、団員一人一人に、このプログラムを経験して学んだこと、感じたことを率直に語ってもらったが、連日のタイトなスケジュールや慣れない集団行動といった大変さの中でも、このプログラムを通じて出会えた韓国の皆さんや共にこのプログラムを乗り切った団の仲間と得難い絆を得られたことや、15日間の経験を通じて自分なりに成長したことなど、全員から非常に前向きなコメントを聞くことができた。大人数の集団を率いる立場、特に引率者として参加者を保護・監督する立場となるのは初めての経験であり、日々手探りの状態で前に進み続けた15日間だったが、最後に団員たちのこうした声を聞くことができ、本当に良かった。本事業の団長にとのお話を頂いた際には寝耳に水という感じでお引き受けしたのだが、20代にしてこのような貴重な経験をさせていただいたこと、非常に有り難く思う。

団員の皆さんには、若い団長ということで頼りなさを感じさせてしまうこともあったかもしれないが、最後まで団の一員として共に歩んでくれたこと、そして、壁を作らず、積極的にコミュニケーションを取ってくれたこと、とても感謝している。ぜひ今回の派遣で得た縁と経験を大切にいただき、近い将来、社会の各分野で大いに活躍して行ってほしいと思う。団のメンバーで集まることがあれば、声をかけてもらえると有り難い。

また、直前研修・帰国後研修も含めれば3週間近くも寝食を共にし、団の円滑な運営のために共に頭を悩ませ、韓国語の不自由な私を随所でサポートしてくださった副団長・渉外の皆さんにもこの場を借りて感謝申し上げたいと思う。個性豊かでそれぞれに異なる強みを持つこのメンバーが、団結して全員で同じ方向を向いて動けたからこそ、団員全員が無事に笑顔でこのプログラムを終えることができたのではないかと感じている。

そして、最後に、今回の我々の派遣に際し御尽力いただいた、日韓両国政府を始め、日本の青少年国際交流推進センター、韓国の韓国青少年活動振興院ほか多くの関係者の皆様、そして、15日間という長期間にわたり、もう団の仲間と言ってもよいくらい我々を常にサポートしてくださったコーディネーターのホ・イェジさん、通訳のキム・チェリンさん、スン・ミナさんに改めて感謝を申し上げて団長報告とさせていただきます。

参加青年代表報告

令和5年度 日本青年韓国派遣

出会いに恵まれた韓国派遣

梶原 芙花

はじめに

私は中学生の頃からK-POPをきっかけに韓国の文化に興味を持つようになり、自然と私にとって「韓国」という国の存在は大きいものになった。韓国で日本製品の不買運動が行われていた2019年、私は高校1年生で、韓国を初めて訪れていた。日本での報道を見て、更にソウル市内の地下鉄や街中で「NO JAPAN」のポスターを実際に目にし、当時は漠然と不安を覚えた。しかし、韓国人たちは皆とても優しく、私が日本から来たと分かると歓迎してくれて、非常に安心した記憶がある。また、高校生の時に学内の韓国語サークルに参加し、韓国の姉妹校とのオンライン交流を行った。その際に出会った韓国人の友人と毎週メールでやり取りをし、日常のささいな出来事を共有できるほど仲良くなった。これらの経験を通して、実際にメディアで報じられている日韓関係と、個人レベルでの日韓関係には大きなギャップがあると感じた。また、年代によって「韓国」に対する認識の違いがあることにも気が付いた。韓国に魅力を感じている一人として、韓国を多角的に理解し、また日韓関係をより良いものにしていきたいという思いを持って本事業に参加した。

印象に残った経験

事前研修から韓国派遣、事後研修を通して多くの経験をし、毎日が刺激的で、学びと気付きの連続であった。特に15日間にわたる韓国派遣では、旅行では行かないような場所を訪問できたことを始めとして、全てが貴重な経験であったと考える。その中でも大韓民国歴史博物館の訪問と各地での青少年交流会が印象に残っている。

大韓民国歴史博物館では、「韓国」の歴史について理解を深め、その中でも特に、日本統治時代の話が印象的だった。日本の義務教育において、日韓間の歴史に焦点を当てて学ぶ機会は少ないと感じる。博物館では韓国の視点から歴史を学び、同じ「歴史」でも立場が異なることで、解釈や視点に大きな違いが生まれることに衝撃を受けた。現代の日本と韓国に共通して、若い世代を中心に、互いの国の文化に親しみをを持っていると言える。しかし、日韓関係に目を向けてみると、歴史と強い関連がある様々な問題が残されていると言える。事前研修における日韓関係に関する講義を通して、日韓の歴史につい

て知るには日本だけの視点からでは不足していて、特に社会問題に関しては、両国の視点が重要であるということ学んだ。この学びを基盤として、博物館訪問にて韓国側の視点から見た歴史と、日本との関係性について学ぶことができ、非常に貴重な経験であった。

続いて、各地で行われた青少年交流について述べたい。全ての青少年交流会において共通していたのは、私たち韓国派遣団に対する歓迎の姿勢であると考えている。参加していた韓国青年たちと年齢が近かったのもあり、私たちを歓迎してくれている姿勢を強く感じた。その中でも特に韓国青年代表団との「日韓青少年交流会」は私の中で非常に大切な経験となった。私は8月に韓国青年が日本を訪れていた際に歓迎会、夕食会、都内体験プログラムに参加する機会を得た。そこで韓国青年と交流を深め、個人的に連絡を取り合う青年もいたため、韓国で再会できることに胸を膨らませていた。実際に韓国青年と再び会って話をすると、皆温かく迎え入れてくれ、嬉しい気持ちでいっぱいになった。この交流会の中でも特に「日韓文化交流の夕べ」を通して、文化の力によって、互いにより一層距離を縮められた経験が印象的だった。日本の文化紹介を考える上で、日本について知ってもらうためにはどのような切り口が良いか、つまり自分たちが見せたい「日本」だけではなく、いかにして日本に対して親しみや興味を持ってもらえるのかに重きを置いた。短い時間でも少しでも自国のことを知ってもらいたい、体験してもらいたいという気持ちを共に持っていたため、互いにとってより良い物を作り上げられたのではないかと考えた。文化交流を終えた後は、互いに打ち解け合い、国籍に関係ないコミュニケーションにつながったと考える。私は自国の文化を紹介し合うことがここまで大きな影響を与えるとは予想していなかったため、非常に驚くとともに、新たな発見へとつながり、印象的な出来事として記憶に残っている。

本事業を通じて得た学び

本事業を通じて、国家間交流及び異文化交流においては、相手を知ろうとする姿勢が最も重要であるということ学んだ。冒頭でも述べた通り、私は以前から韓国の文化に興味があり、本事業に参加する前から韓国語を勉強していたため、訪問国活動中に韓国青年と交流する際も円滑にコミュニケーションを取ることができた。し

かし、周りを見渡してみると、日本語もしくは韓国語ができなくても、携帯の翻訳アプリやボディランゲージ、英語を使って皆コミュニケーションを取ろうと努力している姿が見受けられた。時には私自身が会話の間に入って通訳をする場面もあった。通訳をしているときは、両言語のニュアンスをうまく伝えられずもどかしい瞬間が多々あったが、日韓のかけ橋のような存在になることができたことに対して誇らしい思いもあった。韓国語を話すことができる一方で、それが全てではないということに気付き、「言語」は数多くあるコミュニケーションツールの一つに過ぎないという新たな学びを得ることができた。私が韓国語を話すことができたことで、韓国青年との距離を縮められ、かけがえのない友人ができ、またグループ活動においてもコミュニケーションの障害を低くする役割を果たすことができたのは成果として挙げられると考えている。しかし前述の通り「言語」はツールに過ぎず、それよりも相手のことを理解しようとする姿勢の方が、異文化理解、そして国境を越えたコミュニケーションにおいては重要であるということ学んだ。これは本事業に参加したからこそ得られた学びであると考える。

同時に異文化理解において文化がなす役割について学んだ。青年交流を通して、多くの韓国青年に共通して日本の文化、特にアニメや漫画、音楽に親しみを持っていることを知った。日本でも、音楽のみならず幅広い側面において韓国の文化が浸透していると感じる。一つの国について学ぶ上では様々な切り口があるが、本事業に参加し、その切り口として文化が持つ影響力の大きさを学んだ。当初、「韓国」という国についてより深く学びたいという目標を持って臨んだが、プログラムを通して、特に文化という側面から様々な発見ができたと思う。さらに、プログラムを通して自分がどのようなことを感じたか、どのような意見を持っているのかを周りの団員と共有できたことで、そこからまた新たな発見や自分にはなかった視点生まれ、より発展した学びを得ることができたと考える。

今後の活動について

まず、本事業で出会った縁をこれからも大切にしていきたいと考える。韓国派遣の中で聞いた「出会いは縁だが、関係は努力である。」という言葉が最も印象に残っている。本派遣を通して、各地の韓国人の方々との出会い、韓国の視点から見た「日本」との出会い、新たな価値観との出会い、そして団員との出会い、と「出会い」に非常に恵まれていた。この「出会い」をいかし、これからも関係を継続できるよう努力していきたい。

次に、本事業で得ることができた経験や学びを自ら発信する活動をしたいと考えている。本事業に参加して、韓国人々からの温かい歓迎に感動すると同時に、メディアを通じた情報の受取り方に対する姿勢を改める

必要性があると考えた。現在も日本と韓国の間には様々な問題があるのは事実である。しかし、偏った報道により、日本と韓国に共通して、一部の情報が拡大化されて報道され、日韓関係の問題が過激に取り扱われていると感じる。韓国青年とのディスカッションにて、私はメディアについて意見交換し、日韓に共通してメディアリテラシーを身につけるべきであるという認識を確認でき、情報の真偽を見極める能力を身につけるべきであると考えた。また、在大韓民国日本国大使館を訪問した際に山本一等書記官が、政治的に譲れないことがあっても個人間では政治に影響されない関係の構築が重要であるとおっしゃっていた通り、私たちが個人レベルで構築していく日韓関係においては、互いに好感を持って接することが重要であると思う。その上で、これからは実際に会って人的交流を促進していくことが大切であると考え、私もそのような場に積極的に参加していきたいと考える。私たちのような若い世代が積極的な交流を図り、良い関係を築いていくことが、互いの国に対する認識を変えるきっかけになるのではないかと期待している。本事業で得た学び、経験、出会いの全てを糧にして、新たな日韓関係の構築に貢献できるよう、自分のできるところから、継続的に努力していきたいと考える。

派遣国活動を終えて

樋爪 慶介

1. はじめに

私は過去に韓国の青年のホストファミリーになった経験から、韓国に対し親近感を抱き、より深く関わりたいと思うようになった。そんな中、本事業の存在を知り、迷わず応募した。本事業で実際に韓国を訪れて、文化、歴史を含め韓国についてより深く理解すること、韓国の青年と将来にわたる友好関係を築くこと、そして本事業で得た経験を可能な限り多くの人々に伝えることが私の目標であった。

2. 温かい歓迎に感動

韓国ではソウルを始め、漣川、浦項、慶州など複数の都市を訪れた。いずれの都市でも印象的であったのは、現地の人々が非常に温かく迎え入れてくれたことだ。例えば漣川では、今回訪れた中で最北の小さな街であるにも関わらず、韓半島統一未来センターでは“Welcome Japanese Youth”と書かれた掲示板があったり、その他の施設でも日本語を話せるガイドの方が丁寧に説明をしてくださったりと、手厚くもてなして下さった。また、修練館でも青年たちを中心に私たちを歓迎し、漣川の魅力がよく伝わってくるプログラムを用意してくださっていた。聞いたところによると、漣川郡では日本の青年を受け入れ交流を行うことが初めてであったそうだ。日本から離れた場所で私たちの訪問に備えて様々な準備をしてくださっていたということに、胸が熱くなったのをよく覚えている。

漣川やその他の公式訪問先に限らず、韓国では人々のつながりや優しさを感じる場面が多かった。例えば飲食店では店員さんが笑顔で迎え入れてくれて、次々に料理を運んでくれる。料理の味もさることながら、量も多く、もてなして下さっていると感じずにはいられない。どこに行っても「実家に帰ってきたような安心感」があり、毎回の食事が非常に楽しみだったのを覚えている。また、青年たちとの交流においても、小さな気遣いやおもてなし精神に嬉しくなった。ソーシャルネットワークの発達で人々のつながりが薄れてしまうことが日本では問題視されているが、韓国では日本よりも人々同士の距離が近く、結びつきが強いように感じた。

3. 韓国外国語大学校での講義

人々のつながりの日韓の違いという前述の点につき、13日目に訪問した韓国外国語大学校において非常に興味深い講義を受けた。「韓国語と日本語の挨拶行動」と

いうタイトルであったその講義によると、韓国語の挨拶行動は他者に近づきたいというポジティブ・ポライトネスを重視するのに対し、日本語の挨拶行動は他者が私的領域に入ることを拒むネガティブ・ポライトネスを重視するそうだ。例えば前述した飲食店において、韓国では店員が料理を持っていく際「맛있게 드세요 (マシッケドゥセヨ)」と言う。日本語に直訳すれば「おいしく召し上がってください」という意味であるが、日本では「ごゆっくりどうぞ」という言葉を言うのが一般的であろう。ここには韓国語と日本語の違いがあり、後者は買い上げた商品は既に客のものという前提のもと、「美味しく食べるかどうか」は触れてほしくない私的領域として扱う。これに対し前者は、他者の領域に入ることをいとわず「美味しく食べる」ことを促す。

以上はあくまで言語的な側面から両者を分析した議論であるが、講義をして下さったキム・ドンギョ教授によると、言語的な特徴が人間的な特徴にも影響を及ぼすこともあるという。私はこの講義を聞いたとき、それまでの滞在で感じていた韓国の人々のつながりや優しさが、言語的な面からも説明できるものであることを理解し非常に納得がいった。特に思い出したのが、ソウルでの1泊2日の交流プログラムにおいて韓国青年と寝食を共にしたときのことだ。韓国青年は一人の時間ではなく皆と過ごす時間を大切にするように感じた。友達の間であっても食事の前に「맛있게 드세요 (マシッケドゥセヨ)」と言い合っていることもあり、とても素敵な光景に思えた。日韓の文化の違いを知り、その違いを楽しむことができた一つの経験である。

4. 「準備」の大切さ

本事業は7月に事前研修があり、10月後半の派遣まで約3か月に及ぶ自主研修の時間があった。事前研修で定めた団のスローガンは「未来のかけ橋になろう！笑顔で뽀이팅 (ファイティン)」だ。このスローガンの下で、派遣をより良いものにすべく、団員それぞれが準備を進めた。後悔の残らない派遣となるように、私も与えられた時間で準備を始めた。

まずは、韓国語が全く話せなかったため、大学の韓国人の友達に協力してもらい、挨拶や自己紹介ができるように練習を重ねた。地方プログラムでの交流は主に韓国語で行われたため、自分の好きなものの単語を知っているだけでも、コミュニケーションの助けとなった。自分自身の語学力の低さに悔しくなる場面も多々あったが、帰国後の語学勉強のモチベーションとなっている。

特に準備にこだわったのは韓国青年とのディスカッ

ションだ。私は今夏に韓国青年が日本に訪れた際の日韓青年親善交流のつどいに参加し、そこでもディスカッションをする機会があった。通訳を介したディスカッションを行うのは初めてであったこともあり、その時は議論がスムーズに行かず、時間を有効に活用することができなかった。日本での経験を踏まえて、韓国でのディスカッションはしっかりと準備を重ねた上で有意義な時間にしたいと考え準備を進めた。日本でのディスカッションを通して感じた課題を日本の青年団にも共有した上で、私の班のテーマであった「コロナ禍を経た労働環境の変化」について入念に調べた。また、ファシリテーターとして議論の方向性を定め、時間配分もあらかじめ決めて議論に望んだ。チームでの丁寧な準備が功を奏し、ソウルでのディスカッションは満足の行くものになった。時間が限られており想定外の議論を楽しむ時間があまりなかったが、韓国青年の意見も十分に取り入れながらチームとして成果を発表することができて達成感があった。

その他にも、訪問先に関する事前調査や団としての日本紹介の準備、地元のお土産の準備など様々な形で準備を行った。私は本事業を通し、何事も事前準備が大切であることを改めて実感した。特に、語学力を始めすぐには上達しないようなことでも、できる限りの努力をして小さくても準備をすることが自身を助ける大きな力になることを学んだ。今後の人生においても、事前準備を大切にして努力を積み重ねていきたいと思う。

5. おわりに—事後活動に向けて—

目標として掲げた通り、本事業で得た経験を周囲の人に伝える必要があると考えており、既に大学のゼミや京都府IYEO（内閣府国際交流事業の同窓会組織）の場で経験を共有する時間を設けていただいている。特に、今は日韓交流や国際交流に興味がない人にもその面白さを知ってもらいたいという思いが強い。また、私自身は本事業を通して国際交流の面白さや楽しさを再認識し、さらにグローバルな視点へと視野が広がった。更なる国際交流を続ける姿勢を見せることで、言葉だけでなく行動でも本事業の魅力を発信していきたい。

派遣を終え、これからは団員それぞれが事後活動として国際交流を進めていく。日本全国から集まり韓国で貴重な時間を共に創り上げた仲間たちが、今もそれぞれの場所で活躍を続けていると思うと、嬉しい気持ちが湧き上がると同時に負けてられないという気持ちになる。団のスローガンである「未来のかけ橋」になるには、ここからが本番である。仲間たちからの刺激を存分に受けながら、私も自分なりの方法で日韓、国際交流を進めていこうと思う。

違いを受け入れ、歩み寄る

松熊 心咲

はじめに

私は、令和5年度日本・韓国青年親善交流事業の団員として、15日間韓国に派遣された。この15日間のプログラムは、韓国の歴史や文化を現地で体験することができただけでなく、「他国から見た日本」を意識する契機にもなった。韓半島統一未来センターをはじめ、韓国人向けの施設を訪れる機会も多く、日本が韓国にとって歴史的に非常に存在感のある国であることを実感した。プログラムが進むにつれて、自分の中で韓国と日本の距離が徐々に近づいていくのを感じていた。

以下では、プログラムを通して特に印象に残った点を「農業・食」「青少年」「韓国という国」の三つに分けて記す。

1. 農業・食

私は大学で農業経済学という学問を専攻しているため、韓国の農業事情を自分の目と耳を使って調査することを、目標の一つとして掲げていた。韓国の歴史的集落として世界遺産に登録されている河回村（ハフエマウル）や国立青少年未来環境センターの訪問、韓国青年との会話を通して、日本と韓国の農業事情を比較することができた。

まず、農業面における両国の共通点から述べる。それは、農村部が抱えている問題は、日本と韓国でおおよそ同じであるということだ。両国の農村では、深刻な高齢化・過疎化が進んでいる。農業が産業の中心である河回村でも、住人のうち最年少は58歳の男性とのことだった。日本と同様に、定年を迎えた人々が地元に戻り、農業を始めるというのが一般的だった昔とは異なり、定年を迎えても都市部にとどまる人が増えたのだそうだ。Living Heritageやアグリツーリズムとして農村を活用し、民泊を実施する等、地域活性化のために様々な取り組みも行われていた。

次世代の農業従事者の確保については、訪問した国立青少年未来環境センターと同機関が運営している農業・生命科学の修練館で取り組まれていると予想していた。しかしながらそこでの取り組みは、今日では遺伝子やバイオテクノロジーの実験が中心となっており、農業のことを若者に伝えることがメインだったのは、農業が産業の中心であった昔の話なのだそうだ。

次に、韓国の農業政策について述べる。

韓国は非常に高いリサイクル率を達成していることで知られるが、そのための取り組みが各家庭レベルで実際に行われているのかを確かめるべく、現地で交流した韓国

青年にいくつかの質問を投げかけた。日本のメディアからの情報では、ゴミ捨て場に生ごみの重量と支払い金額が比例するゴミ箱が設置されており、捨てるたびにお金がかかるため、住人はできるだけ生ごみから水分を除いたり、コンポストを作ったりと工夫して生活しているとのことだった。しかしながら実際には、各家庭が生ごみを灰にする機械を所持しており、灰にした生ごみは燃えるごみと一緒に捨てることが多いそうだ。また、マンションのリサイクルスペースにゴミを持って行くと、家賃に含まれているサービス料で管理人がゴミを分別してくれるという。それらを住人は「リサイクルのため」というより、生ごみから発生する臭い対策のための便利な機械やシステムとして捉えているのだそうだ。

加えて、韓国では学校給食を利用して、地産地消や有機農業の普及にも力を入れているとの情報を入手していたため、その件についても青年に問いかけた。実際に韓国の学校給食を食べて育ったその青年によると、韓国の小学校では、どこの地域で作られた農産物が使われているのかが、メニューを見ると分かるようになっているそうだ。韓国では、学校給食に対して給食費の無償化やオーガニック食材の使用以外にも、様々な工夫が凝らされていると知った。

ここからは、韓国の食文化について触れる。以前から、韓国には食べ残しの文化が存在するとは聞いていた。食べ残しは「お腹いっぱい食べました。美味しかったです」ということを示すため、プラスの意味を持つというのだ。しかしながら近年、世界的に食品ロスが問題になっており、加えて韓国では、地産地消、有機農業の普及等、いわゆる環境に優しい取り組みが積極的に導入されているため、食べ残しは現代の事情に相反するのではないかと疑問を持っていた。韓国青年によると、食べ残すか食べ切るかといったことをそもそも気にする文化がなく、決して食べ残す方が良いというわけでもないそうだ。ただ、日本人は「出されたものは基本的に食べ切る」という文化であるため、buffet形式の食堂で、自分でお皿によそった食事の半分以上を残す韓国青年に、初めは衝撃を受けた。

また、15日間様々な飲食店を訪れたが、提供される食事の量が非常に多いため、飲食店側も食べ残しを前提として食事を提供しているように感じた。

2. 青少年

韓国では、青少年に対して多種多様な「機会」を提供していた。今回のプログラムでは、地方の青少年修練館で現地の青少年と交流したり、韓国ジョブワールドや区

立瑞草ユースセンターといった青少年のための施設を見学・体験したりした。

浦項にある青少年修練館では、企画、広報、運営、モニタリングを全て青少年が担当し、様々な活動を行っているそうだ。実際に、私たち派遣団の歓迎会の司会進行を務めていたのは中学生の女の子であった。

韓国の青少年は受験勉強で忙しいというイメージを持っていたため、課外活動に力を入れている学生はどのように勉強の時間を確保しているのかが気になった。実際に交流した高校生のうち、ある高校生は大学で日本料理を専攻した後、料理人になることを志しており、ある高校生は大学には進まず、鉄鋼関連の企業で働くために既に就職活動をスタートさせていた。私はそれまで、韓国の学生は全員が一流大学を目指して、幼いころから勉強漬けの生活を強いられていると想像していたが、実際には志望するキャリアは様々で、全員が同様の進路を目指しているわけではないということを知った。なお、インタビューをした場所がいずれも地方であったために、大学進学志望度に地域格差が存在している可能性も考えられる。

区立瑞草ユースセンターは、青少年が先端技術を使った体験活動を行える施設であり、青少年の興味がありそうなものと組み合わせるなどの工夫も施されていた。青少年のための職業体験施設である韓国ジョブワールドは、年齢ごとに体験スペースを分けることによって、幅広い年代の興味関心に対応していた。

3. 韓国という国

飛行機で上空から韓国の国土を見下ろしたとき、最初に目に飛び込んできたのは高い建物の数々であった。日本では都心の一部にしか見られない光景が、韓国では窓から見える範囲の至る所にビルが立ち並んでいたのだ。全ての建物が同じ高さで、同じ色をしていた。おそらく日本でいう「団地」のようなものだと思う。個性を目立たせるといよりは、均質性が追求されているようだった。一方で、実際に街を歩いてみると、歴史的な建造物や市場も数多く残されていた。「漢江の奇跡」という言葉があるように、短期間で経済的な急成長を遂げたことが、街の様子からうかがえた。その影響もあってか、今の韓国は厳しい競争社会の国として有名だ。「老人は今の早すぎる移り変わりについていけない。」「若者は就職難で生きづらい。」これらは、現地で出会った韓国人によって発せられた言葉である。国民自身も、自国の競争が激しすぎるということを知覚していた。しかし今の韓国では、自分たち自身でその風潮を変えることはできないのだという。

終わりに

今後の日韓関係をより友好的なものにしていくためには、若い世代が個人レベルでの交流を積極的に行い、互

いの歴史・文化への理解を深めようと努めることが必要だ。両国の政治次第で、日韓交流にどれだけの力を注がれるかが異なるため、年代によって日韓意識の違いが見られる。つまり、世代交代に伴い、現状の日韓関係にも変化が表れるということだ。それを友好的なものにできるかどうかは、これから未来を築いていく若い世代が、互いの国に対してどんな印象を持っているかに委ねられている。今回の派遣でたくさんの韓国青年と交流したが、誰一人同じような青年はいなかった。各々が異なる趣味や興味関心を持っており、性格も人それぞれであった。「韓国人」と一括りにしてしまうと、メディアの印象操作に影響されやすくなってしまう。匿名性による過小評価を排除するためにも、「韓国人」とまとめてしまうのではなく、色々な人がいることを理解し、彼らのことを知ろう、歩み寄ろうという姿勢が大切だと思う。

韓国派遣事業を通して、私は新たに「フードツーリズム」という分野に興味を持った。フードツーリズムとは、ある地域特有の食や食文化を楽しむことを目的とした観光のことを指す。このプログラムで体験する機会が最も多かったのは、生きていくのに欠かせない「食・食文化」であった。実のところ、私は韓国の食文化に慣れるのに少し時間がかかった。しかし「この文化があるからこそ、今の韓国がある」と思うと、受け入れることができるようになった。将来、日本の食・食文化を通して、世界中の人々に、その地域が持つ「価値」を提供していくためには、世界にどのような食・食文化やフードツーリズムの事例が存在しているのかを知っておく必要がある。今後、世界の食・食文化に触れていく中で、自分の持つ前提とのズレに混乱することはきっとあるだろう。しかしながら今回の韓国派遣で学んだことを生かし、拒絶するのではなく、総合的にその国のことを理解しようという気持ちを忘れないようにしたい。

韓国派遣を通して

南 英里奈

本事業に対する思い

職場からの推薦により本事業に応募することとなった。私は小学生の頃から韓国に興味を持つようになり、韓国語が学べる学校に入学し、5年間を通して韓国語を勉強した。留学経験はないが、卒業する頃には韓国語能力試験6級に合格するまでの韓国語を身につけた。現在の職業を選択した理由も、韓国語をいかしたかったからである。

このように、私の人生の大部分に韓国という国が関わっている。学校の卒業論文では、『北陸地方における韓国人留学生受け入れに関する一考察』というテーマで研究を行った。留学では、若者同士の交流ができることから、国際理解の推進等、今後の日韓関係により良い影響を与えることが期待できる。私は、日韓における若者同士の交流をもっと盛んにしたいという思いからこのテーマを選択し、韓国人留学生を増加させるための方策を提言した。

このような考えを持っているにもかかわらず、私は留学経験もなく、国際交流の経験もほとんどなかった。本事業の存在を知ったときは、自分の語学力や知識、経験をいかし、私も日韓関係の発展に貢献する一員になりたいと思い、参加したいと強く感じた。また私は、幼いころから民謡を習っており、日本の伝統文化に長く触れてきたため、自分の韓国語をいかしながら日本の伝統文化の魅力を伝え、韓国の文化についても深く学びたいという個人的な目標も持った。

この強い思いが伝わったのか、無事に選考を通過し、本事業に参加することとなった。

事前研修から韓国派遣まで

韓国派遣に先立ち3泊4日の事前研修が行われ、今後の活動を共にする日本青年たちと初めて顔を合わせた。私は社会人としての参加であるが、団員のほとんどは大学生であり、更にバックグラウンドも大きく異なる青年たちであった。自己紹介の時間で、団員から本事業に参加した動機を聞いたが、参加した経緯は違ってそれぞれ熱い思いを感じる事ができ、今後一緒に活動することがますます楽しみになったことが思い出される。

事前研修では、団目標や係、現地で韓国青年たちと行うディスカッションのテーマ等を定めることとなった。

係決めでは、韓国青年に日本の伝統文化の魅力を伝えたいという思いから、日本紹介係を選んだ。どのような発表をしたら韓国青年がより興味を持ち、日本の魅力を感じてくれるかということが一番を考えながら案を出し

合い準備を始めた。事前研修が終わると、出発前研修まで全員が直接集まる機会はないため、時間を最大限に活用できるように努めた。

ディスカッションのテーマ決めでは、以前からニュースやドラマを通して関心が高まっていた「教育」を候補に挙げた。韓国の教育事情については関心が高い団員も多く、「学歴社会が教育に与える影響」というテーマでディスカッションをすることとなった。

事前研修中、係やディスカッションのテーマ決めで壁にぶつかることはなかったが、団目標決めではなかなか意見がまとまらずに、時間がかかってしまった。しかし、このような状況でも決して悪い雰囲気になることはなく、団員全員が自分の意見を主張しながらも、相手の意見を尊重することで乗り越えることができた。「未来のかけ橋になろう！笑顔で対峙（ファイティン）」という団目標に決定し、派遣に向けて良いスタートを切ることができた。

事前研修が終わり、約3か月の自主研修期間となった。この期間には、韓国に関する調べや、係・ディスカッションの準備等を行った。団員が全国各地から集まっている点、さらに社会人と学生という生活の違いから、事前準備は非常に大変であった。しかし、一人一人が責任をもって割り振られたものを準備することでその困難を乗り越え、非常に有意義な期間となった。

印象に残ったプログラム

派遣プログラムは、女性家族部・在大韓民国日本国大使館への表敬訪問、博物館の見学、韓半島統一未来センター訪問、寺院や古墳の見学、韓国青年との交流会及び討論会等、非常に多くの内容が組み込まれていた。中でも印象に残ったプログラムを三つ紹介したい。

一つ目は、漣川の訪問である。派遣3日目に、北朝鮮のすぐ隣にある漣川郡を訪問した。漣川1日目には、韓半島統一未来センターを訪問した。そこではまずVRを使用し、統一未来体験を行った。私は、以前から韓国の軍隊に関心があり、調べていくうちに、韓国に徴兵制度がある背景として、韓国は現在も北朝鮮と休戦中であること、また韓国と北朝鮮の今後の関係についても強い関心を持つようになった。しかし、韓国には「統一部（部は日本でいう省）」が存在し、北朝鮮との政治的対話や交流に関する政策の策定など、朝鮮半島統一に向けて様々な活動を行っていること、また今回訪問した「韓半島統一未来センター」もその統一部が運営していることを今回の派遣で初めて知った。統一未来体験活動では、南北分断の過程から、朝鮮半島統一後の未来を体験

した。もし朝鮮半島が統一したら日本にはどのような影響が出るのかについて、改めて考える機会となった。また、朝鮮半島分断当初、南北を分けていた北緯38度線も見ることができ、隣国であり文化的にも非常に近い韓国が休戦中の国だということを改めて感じた。

漣川2日目は地元青年と交流し、朝鮮半島統一について様々な意見を聞くことができた。統一については韓国の青年の中でも意見が分かれているということも印象的であり、漣川の訪問は、私にとって非常に貴重な経験となった。

二つ目は、日韓青少年交流会で行った、文化交流の夕べである。日韓青少年交流会は、今年度の韓国青年代表団と1泊2日で交流を深めるプログラムであり、文化交流の夕べでは、韓国青年、日本青年がそれぞれ準備した出し物を発表した。韓国青年の発表は、韓国各地の食べ物を紹介するプレゼンテーションやテコンドー・歌・ダンスなどであった。私たち日本青年は、プレゼンテーションでの日本紹介・書道・民謡・合唱・けん玉・ダンスを披露した。プレゼンテーションでは、韓国でも有名な日本のアニメの聖地巡礼スポットを紹介したり、日本のおすすめスポット、コンビニエンスストアのおすすめ商品について発表を行ったりした。また、日本文化の魅力を伝えたいという思いから発表することとなった民謡には、私の出身地でもあり、韓国青年代表団が今年の夏に訪れた地でもある、富山県の民謡である「越中おわら節」の踊りを選んだ。韓国青年にも馴染みがある土地の民謡で日本文化の魅力を伝えることができ、非常に嬉しく思った。合唱、ダンスでは、韓国で有名な日本の歌やK-POPを発表した。韓国青年も一緒に歌ったり踊ったりしてくれ、また、日本紹介が終わった後は、「日本青年の発表は、全体を通して一連の流れがあっすぎて感動した。」という言葉をもらい、準備の苦労が一気に消えた瞬間だった。大きな盛り上がりを見せた文化交流の夕べは最も印象的だったプログラムである。

三つ目は、日韓青少年交流会の2日目に行った討論会である。私は、「学歴社会が教育に与える影響について」というテーマで討論を行った。私たちのグループは急遽通訳が不在となり、私と日本語が話せる韓国青年が通訳を行うこととなった。団員が通訳を担うことで、同じ国の青年同士で議論を始めてしまい、その際の通訳が追い付かず相手国の団員に話が届かない等、序盤はともに意見交換ができる状態ではなかった。そこで、一旦話し合いを中断し、現状の良い点を話し合ったり、ルールを設けたりすることで軌道修正をすることができた。

私自身、ディスカッションの経験があまりない中で、言語が違う青年たちとのディスカッションであり、戸惑うことやうまくいかないことも多かったが、団員と一致団結し、韓国青年とも互いを思いやり理解することで、困難を乗り越えることができた。この討論会を通し

て団員や韓国青年とさらに仲を深めることができた。

本事業で得たもの・今後の活動について

本事業で私は、語学面はもちろん、人として大きく成長することができたと感じる。

語学面では、困っている団員がいた際に通訳したり、現地の方と積極的に韓国語でコミュニケーションを取ったりした。また、日本語が堪能な韓国青年にも刺激を受け、私も現状に満足せず、これからも韓国語学習を続けていきたいと感じた。特に私が勤務する税関では、今後も韓国語をいかす機会が多くある。どんな小さな機会も逃さず、常に向上心を持ちながら業務にいかしていきたい。

語学のみならず、韓国の文化についても学ぶことが多くあった。私は今まで、韓国文化について深く学んできたつもりであった。しかし、実際に15日間韓国で生活したからこそ肌で感じることのできる韓国文化がたくさんあった。時にはその文化に戸惑うこともあったが、日本と異なる文化に対しても、決して否定せずに楽しみ受け入れる、異文化理解という面でも大きく成長できたと感じる。本事業で得た異文化理解の力は、今後国際的な技術協力の面でいかしていきたい。技術協力は、日本からの一方的なものでは成り立たず、相手国の文化への理解があってこそ成り立つと私は考えている。今回学んだ異文化理解の力を今後の技術協力の面で役立て、日本の更なる発展に貢献していきたい。

また、同じ日本の団員からも学ぶことが多くあった。本事業は楽しいことばかりでなく、時には団員の連携がうまくいかないなど大変なこともあった。そういった際は、団員同士がしっかりと向き合い、話し合うことで団結し解決していくことができた。さらに集団生活の中で、自分がすべきことは何か、できることは何かを常に考え行動することができた。今後職場で業務をする際にも、上司の指示を待つだけでなく、自分にできること、やるべきことを常に考えながら率先して行動に移していきたい。

長い間、韓国という海外で苦楽を共にした団員は、本事業で得た最高の仲間である。今後も多種多様な考えを持った団員たちと交流を続け刺激し合って高め合いながら、自分の視野を広げていきたい。

ディスカッション成果

令和5年度 日本青年韓国派遣

ディスカッションの概要

日時	10月28日(土) 9:00~15:30
場所	ハイソウルユースホステル(ソウル)
プログラム名	日韓青少年交流会
テーマ	テーマ1:教育 ・学歴社会が教育に与える影響 テーマ2:労働 ・新型コロナウイルスの流行による労働環境の変化 ・上記の変化によって生まれたメリットとデメリット ・日韓共通のデメリットを改善、解決していくためにできること テーマ3:デジタル ・AIをどのような範囲で社会的に活用すべきか テーマ4:メディア ・匿名報道と実名報道について ・メディアが社会に与える影響について テーマ5:社会 ・少子高齢化に伴う結婚観や子育て、伝統文化への影響について
参加者	日本青年 25 名、韓国青年 26 名
スケジュール	9:00 - 9:30 討論会オリエンテーション 9:40 - 12:00 討論会第1部 12:00 - 13:00 昼食 13:00 - 14:30 討論会第2部 14:40 - 15:50 討論会発表

分科会の概要

テーマ	教育
参加者	日本青年5名、韓国青年5名
トピック	学歴社会が教育に与える影響

成 果

日韓両国の学歴社会及び教育の現状について共有した上で、両国で共通する教育の問題点やそれに対する改善策を検討した。ディスカッションの内容は以下の通りである。

1. 教育の現状・特徴

ディスカッションの導入として、学歴社会に関する自国の現状や特徴的であると思う点について日本・韓国それぞれの青年から発表を行った。

韓国青年は、就職に関連した事例に注目して、例えば、韓国の公共機関における高校新卒採用が2019年から2022年の4年間で半減（14.7%から7.6%へ減少）していることや、尹錫悦政権において医学部の入学定員が増えたことから、小学生向けの医学部対策クラスへの熱が高まっていることなどを取り上げた。これらの事例に代表されるように、韓国では就職活動のために学士号を持つことが望ましく、そのために幼い頃から親が子供を私立学校に入れたり、私費教育を受けさせたりする傾向があるようだ。

日本青年は、学士号を持っているかよりも、どの大学を卒業したかが重視されているという所感を述べた上で、日韓の大学進学率について言及した。事前調査によると韓国では大学進学率が70%を超えるのに対し、日本は約56%であることが分かり、韓国の方が学歴社会の傾向があると推察でき、学歴がその人の社会的ステータスに影響をより強く与える社会なのではないかと主張した。

このように、自国の教育やそれを取り巻く学歴社会の現状について共有する中で、日本と韓国における教育の相違点と共通点が浮かび上がってきた。

相違点としては、受験機会が挙げられる。日本では幼稚園から大学まで、各教育機関に入学するタイミングで受験をする機会があるが、韓国では大学受験が最初で最後の受験の機会になることが多い。もちろん、近年では科学や外国語に特化した特殊目的高等学校や国際中学校などの特性化中学校へ受験をする人々も一定数いるようだが、日本に比べると中学・高校での受験率は高くないという。つまり、日本では受験競争が各教育機関に比較的分散されているのに対し、韓国は大学受験に一極化しているといえる。また、日本では大学に附属した各教育機関があり、いわゆる「エスカレーター式」と呼ばれる内部進学方法があるが、韓国には「エスカレーター式」という用語も含めて存在しないということが分かった。

このような教育システムの違いがある一方で、共通点も見つかった。それは、家庭の経済力や居住地域の差が、子供の学力や学歴に影響を与えているということである。例えば、韓国の場合、首都圏か地方か、首都圏の中でもソウルか否か、江南のような高級住宅街かソウルの郊外かなど、様々なレベルで差が生まれているという。日韓両国で親の所得の違いや生活環境が、人的ネットワークのような社会資本に加えて、文化的素養といった文化資本にも大きな影響を及ぼしているといえる。

2. 問題点

上述のような学歴社会の影響を受けて、両国の青年が日韓の教育に関して問題であると考える点について意見を出し合った。その結果、次の三つの問題点が挙げられた。

1点目は、学歴による社会的・経済的地位への影響である。これは韓国青年側から出た意見で、最終学歴が高校か大学か、または短期大学か四年制大学かなどという違いによって、就職先での初任給や役職に差が出るということであった。同じ現象は日本でも見られる。学校卒業後の人生においても、学歴が個人の評価や社会的地位に影響を与えることは、個人が持つ能力やスキルを軽視しているといえるのではないか。

2点目は、教育の手段化である。これは、日本の社会学者である山内亮史氏の言葉を借りたもので、本来の教育の目的は、個人の教養を深めたり、興味関心を伸ばしたりすることである。しかし、現代の学歴社会においては、学ぶことが受験競争に勝ち、将来の成功を掴むための「手段」と化してしまっているのではないかという意見が挙がっ

た。現在の学校教育や私費教育では、学ぶことの本質が見失われ、勉強が厳しい競争と結びつくネガティブなものとして受け取られてしまうことは大きな問題であるといえる。

3点目は、子供の精神的ストレスである。学校での成績や受験の合否結果が、その後の人生の社会的・経済的地位に影響するというプレッシャーから、過度なストレスや不安を感じ、精神的健康を損なう児童生徒がいる。実際に、警察庁「自殺統計」によると、日本の男子大学生の自殺原因の一位は「学業不振」で、「その他進路に関する悩み」が続く。このように、学業・成績不振の子供たちが勉強のストレスによってメンタルヘルスの問題を抱えることも、日韓の教育の課題と言えるだろう。

3. 改善策

最後に、上記2の問題点を踏まえ、今後の教育の改善策について話し合った。「学力・学歴以外の部分に目を向ける社会作り」と「学歴に縛られない生き方の普及」の二つの方向性が提案された。

まず、「学力・学歴以外に目を向ける社会作り」という方向では、例えば総合型選抜（旧AO入試）のように、学力試験以外の方法で、志願者を多面的に評価する試験方式を増やすのが良いのではないかという意見が挙げられた。また、企業においても学歴を含めた個人情報情報を排除し、個人の適正や能力だけで評価する採用方法であるブラインド採用の導入や、高卒採用の拡大も、学歴に固執した教育からの脱却に効果的な方法であると考えた。

そして、「学歴に縛られない生き方の普及」という方向では、留学制度の拡大・充実や、学歴に関係なく活躍している社会人の講演会への参加を提案した。国内外問わず、自分が生まれ育った生活圏とは別の地域・社会で生活したり、学歴を使わずに働いている大人の話の聞いたりすることは、価値観や視野を広げることにつながる。世界には多様な生き方をしている人がいることを知り、人生は学歴だけでは決まらないと思うことができれば、学びの本質を見失わないだろう。このような取組みは、政府による教育制度の構築だけでなく、個人レベルの活動（例えば、ソーシャルネット・ワーキング・サービスで多様な生き方を発信するなど）によっても実行することができる。

教育グループ感想

執筆者：新 亜弥乃、上田 菜々葉、粉川 真帆、澤田 ももか、南 英里奈

我々は、「学歴社会が教育に与える影響」というテーマの下、学歴社会の影響を強く受ける日韓両国の教育の現状や問題点、その解決策についてディスカッションを行った。本感想文は、教育グループの5名の感想を、ディスカッション係の新がまとめる形で作成した。以下、事前準備内容、ディスカッションを通じた学びの2点について述べる。

1. 事前準備

事前研修から韓国を訪問するまでの約3か月間、各自でディスカッションテーマに関連する図書や論文を探し、予備知識を身に付けるようにした。また、2回のオンラインミーティングを行い、メンバー間の情報交換や進捗確認を進めた。さらに、大まかなディスカッションの流れや取り上げたいトピックについても確認を行い、メンバー全員で共通認識を持った状態で本番を迎えられるように準備した。

2. 学んだこと・気づいたこと

教育グループメンバー5名それぞれの感想に共通して見られた意見を3点取り上げる。

2-1. 事前準備の重要性

上述のような事前準備をして臨んだ結果、両国の現状を発表するだけに留まらず、今後の課題や解決策についての話し合いの時間を十分に取ることができた。とりわけ、自国である日本の教育についても調べていたことで、韓国青年から日本の教育事情について質問をされた際に、個人的な経験だけでなく、客観的なデータや根拠に基づく回答をできたことが良かった。

2-2. 役割やルール設定の大切さ

教育グループは運営の都合で直前に通訳が不在ということが分かり、両言語が話せる団員が通訳を行うことになった。そのため、通訳担当の青年が自分の意見を発表しづらかったり、同じ国の青年同士で議論してしまったり、序盤はまともに意見交換ができる状態ではなかった。しかし、発言する際のルールを設けたこと、理解が浅い点についてはその場で確認するようにしたこと、更に、ファシリテーター役の運営の方が要約や補足説明をしてくださったことで軌道修正することができた。最終的な発表ポスターを作成する段階では、両言語話せる青年は発表内容の最終決定をし、そうでない青年はポスターのレイアウトを考えるなど、個々人が自分の役割を見つけ、限られた時間の中で効率的にまとめる作業をすることができた。

2-3. 個人学習だけでは得られない情報やアイデア

小学生向け医学部対策クラスが存在や、ブラインド採用の導入など、事前準備では知り得なかった韓国教育の現状について聞くことができたのは大きな収穫だった。また、事前準備の段階で一人では考えることが難しかった改善策についても、ディスカッション中に様々な考えを聞くことで、刺激を受けて自然とアイデアを出せるようになり、そのような経験からもディスカッションすることの重要性を感じる機会になった。

分科会の概要

テーマ	労働～新型コロナウイルスの流行を受けて労働環境はどのように変化したのか～
参加者	日本青年5名、韓国青年6名
トピック	・新型コロナウイルスの流行による労働環境の変化 ・上記の変化によって生まれたメリットとデメリット ・日韓共通のデメリットを改善、解決していくためにできること

成 果

1. 韓国での現状

韓国ではリモートワークが導入されて一時的には広がったが、現在は従来の出社型の勤務形態に戻っている企業が多いという。一方、コロナ禍前と比較すると勤務時間や休暇の取得方法に柔軟性が生まれ、働きやすい環境になったように感じるという意見もあった。

また、飲食店などにおける様々なサービスが非対面式になったことから、キオスク端末やタッチパネル式の自動案内システムなどの設置が広がり、通信・電機・プログラミング関連の企業が短期間で目まぐるしく発達し、当該分野での雇用が増加した。その一方で、デジタル化が進んだことにより、高齢者や子供など、電子機器の取扱いに慣れていない人が不便さを感じる場面も多く見られるようになってきているという。

更に、大型施設において来館者の体温を測定する係やマスクの着用を呼びかける係など、コロナ禍に一時的に必要とされていた職業に就いていた人が一気に職を失っていたり、経営状態の悪化等により各企業が必要なときに必要な人数のみを採用する不定期採用に移行していたりしており、失業率増加や就職困難の問題が深刻化している。このような問題と関連し、新型コロナウイルスの流行による生活への不安等からうつ病になったり、精神的に不安定になることを表す「コロナブルー」という言葉が生み出されるほど心の不調を訴える人が増えたりしているという。

2. 日本での現状

新型コロナウイルスの流行による労働環境の変化の一つとして、リモートワークの導入と浸透が挙げられる。リモートワークを実施することで通勤時間の短縮や勤務時間の調整が可能になり、家族との団らんや余暇などの私生活に充てる時間が増加したと言われている。

また、企業側の雇用スタイルが多様化し、副業や兼業を認める企業も増加しており、余暇時間で副業を行い、収入の増加やスキルアップを図る人も増えている。その一方で、生産性の低下や情報流出の危険性、企業側の勤怠管理の難しさなどの問題も指摘されている。

更にリモートワークの増加と関連し、社内での法定外福利厚生が充実したとも言われている。従来の交通費や家賃補助等だけでなく、在宅勤務のための電気料金補助や精神的サポートのためのカウンセリングを実施するなど、各企業においてユニークな福利厚生が考案されている。これらの福利厚生の内容が職業選択において重要な判断要素にもなりつつある。

上記のように働き手にとってメリットと思われる点がある一方で、リモートワークの増加による運動不足やコミュニケーション不足が心身の健康面に悪影響を及ぼすとの見解も多数ある。実際に新型コロナウイルス流行後に、うつ病患者が増加したとの結果が出ている。加えて、コロナ禍において児童虐待の通報数が過去最多になったとのデータもあり、雇用の不安定化や勤務形態の急激な変化による心身へのストレスが、虐待への一因になった可能性も指摘されている。

3. 上記現状を踏まえた上での意見交換の内容

上記現状を共有した上で両国に共通する問題点を①情報弱者の適応、②就職困難者や失業率の増加、③心身に与える悪影響の3点に整理し、問題解決のために私たちがなすべきことを考えた。

1点目は「情報弱者の適応」である。日本でも韓国と同じく非対面式の電子サービスが増加しており、不便さを感じている高齢者や子供が多いと思われる。両国ともに、公共施設や各企業などで操作方法の講習会等が無料で実施されているが、講習会の認知度が低く、制度自体も不十分である。まずはそうした講習会の認知度を高めるための広報活動を行い、制度面でも充実させていく必要があると考える。また、電子サービスの利用方法を覚えて活用してい

くという前向きな意識を持つ人が少ないため、そのような人が積極的に学ぶ意識を持つことができるよう働きかけていく必要もある。併せてタッチパネルの文字を大きくしたり選択肢を単純にしたりするなどして、電子機器に不慣れな人でも簡単に操作できるように工夫することも重要であるといえる。

2点目は「就労困難者や失業率の増加」である。各企業や公共団体が実施している人材シェアの取組みや、大学と企業による就職支援制度（例えば、特定の大学に進学すればそのまま特定の企業に就職できる制度）など、両国で既に取り組まれている改善策がある。このような取組みに対して積極的に情報収集し、場合によっては私たちも活用していくことが大切であると考えた。

3点目は「心身に与える悪影響」である。両国ともにうつ病のり患者やコロナブルーを訴える人の数が増えている現状を踏まえ、そのような状態に陥らないためにどうするべきか、また症状を改善していくためにはどのような対応が必要かを考えた。まず、精神的な問題を抱えた人を受け入れられる病院や施設を充実させる、学校や企業等でカウンセラーを雇用するなど、体制を整えることが必要だ。また、病院や施設においても匿名性が守られるような受診・相談方法が導入されれば、人々が助けを求めることがより容易になると考えた。加えて、そもそも精神的な疾患に対してマイナスイメージが強すぎるのが、悩みや不安などを誰にも相談できずに一人で抱え込んでしまう要因として考えられる。今後は一人一人が精神的な疾患に対してのイメージを改めていく必要があり、そうした意識改革の重要性を各自が発信していくことも大切であるという結論に至った。

4. 発表の内容

意見交換の内容を受け、日韓の共通点をまとめた上で、「労働環境の変化」「変化によるメリット」「変化によるデメリット」「デメリットに対する解決策」の四つの項目に分けて発表を行った。また、発表用の模造紙を韓国語と日本語で作成するにあたり、一言一句全く同じ記載内容にするのではなく、同じ趣旨の内容を、双方の参加者が理解しやすいような言葉で言い換えて記載するようにし、意見交換で得た成果が両国の参加青年に十分に伝わるように心掛けた。

労働グループ感想

執筆者：子安 里采

労働グループでは、新型コロナウイルスの流行を受けて労働環境はどのように変化したのかをテーマに、労働環境の変化、変化によって生まれたメリットとデメリット、日韓共通のデメリットについての改善策に焦点を当て、議論及び検討した。

自身は大学生であるため労働グループに参加するに当たり、社会人である参加青年らからいろいろな話を聞き、見聞を広めることができた。また、事前研修から訪韓までの約3か月の間、労働に関する個々人の興味分野や割り当てられた課題に対し、フォローアップをお願いした。この場を借りて感謝申し上げたい。

ディスカッション当日はまず、互いの国の現状などについて意見交換を行った。韓国ではコロナ禍にリモートワークが導入され、労働環境に柔軟性が生まれたという点で日本と同様であった。また、韓国は非対面サービス（キオスク端末や自動案内などのデジタル化）の導入に積極的で、実際に訪問国活動中にもたくさんの非対面サービスに遭遇し、日本よりデジタル化が進んでいる印象を受けた。このようなサービスの発達により、通信・電機・プログラミングの分野において雇用は増加したが、アフターコロナを迎え、コロナ禍において必要とされていた職業に就いていた人が職を失ってしまったという状況があることを知り、とても驚いた。特に韓国は「就職難」というイメージがあったため、失業率の増加は予想通りであったが、コロナ禍を経て雇用形態の変化に影響を受け、より厳しい現状に直面していると感じた。実際にある韓国青年から「就職先が決まらないため、卒業を遅らせている」という声を聞くと同時に、就職活動のために卒業を延期する制度が韓国にあることを知った。日本においても同様の制度はあるが、実際に利用している学生をあまり聞くことがなく、また、日本における就職活動が早期化していることから両国を比較して労働事情の差異を実感した。

最後に、労働環境の変化については議論を重ねたが、強く印象に残ったこととして特筆すべき点は、「心身に与える悪影響」であると感じる。韓国において「コロナブルー」という造語があるように、昨今、両国において精神的な疾患を抱える人が増加している。社会はこのような疾患を抱える人へのサポートだけでなく、精神疾患に対するマイナスイメージを払拭することも重要ではないだろうか。私たちが生きる21世紀がよく「心の時代」と呼ばれるように、心身ともに健康に生きるという意識も労働環境改善の一助になると考えた。

分科会の概要

テーマ	デジタル
参加者	日本青年5名、韓国青年5名
トピック	AIをどのような範囲で社会的に活用すべきか

成 果

現在の日韓両国におけるAI活用事例を踏まえて、AIの利便性および活用時の課題について意見交換した上で、AI活用に向けて今後取り組んでいくべき対応の方向性を議論した。ディスカッションの内容は以下の通りである。

1. 韓国及び日本における現状

韓国におけるAI活用の現状として、「ChatGPT」の利用が挙げられる。近年では日本においても注目を集めている生成系AIであり、例えばウェブの開発時に用いられている。「ChatGPT」を利用することで、高度なプログラミング技術を擁していない社員であっても、十分に開発業務に携わることができる。それだけではなく、教育面においても子供の学習サポート教材として活用の幅を広げている。しかし、確実な学習効果が得られるか不透明である点や、AIの取り扱う情報の精度が不安視されている点など、懸念点もある。

一方、日本においては、医療分野におけるAIの導入例が挙げられる。医療機器にAIによる提案機能を組み合わせて診療を実施している。まだ一般的な取組みではないが、将来的な医療分野での人手不足を補うという意味でも重要視されるべき活用法である。また、自動運転技術にもAIが活用されている。周囲の歩行者や信号を基に判断して運転者なしで走行できるが、実際に事故が発生した際の責任の所在については議論の余地がある。

2. 上記現状を踏まえた上での課題に関する意見交換

AI技術の発展により今後発生が危惧される課題について、どのように解決していくべきかという方向性を含めて話し合った。ここでは特にメリット、デメリットを含め議論になった二つのトピックについて紹介する。

第一に、生成系AIの活用についてである。短時間で多くの情報をアウトプットすることができ、今後の活用に多くの期待を集めている。一方で、日韓双方の青年から、情報の正確性を欠き、全てが正しいとは限らないため、識別することが難しいこと、その間違った情報を活用した際の責任の所在が不明瞭であることに関する指摘があった。また、韓国側からは、AIには共感する力が不十分であるため、人間の代替としての相談サービスには対応できないのではないかという意見が挙げられた。これに対し日本側は、感情に関するデータも幅広くAIに教え込むことで、将来的に感情面も対応可能になる見込みがあるという考えを伝えた。

第二に、教育現場での活用についてである。教員不足を補える点や、各生徒にパーソナライズしたコンテンツを提供できる点が利点として挙げられた。しかし、韓国青年からは、教員自らの経験談の共有こそ学ぶモチベーションにつながるため、AIだけを用了教育は難しいのではないかと、という意見が挙がり、日本側も賛同した。日本には既にAIを活用した生徒の学習管理が成功している事例もあることを提示し、教員の補助的にAIを活用していくべきではないかという考えにまとまった。

課題全般に対して、それぞれの分野で適切なルールメイキングをした上で、AI技術を取り入れていくべきだという意見に日韓青年ともに多くの賛同が得られた。

3. 今後の展望

今後AIを社会的に活用していくために重要な対応は何かを議論し、4点に整理した。

第一に、エラー検知と予測である。人間と同様AIもミスをすることを念頭に置いた活用が求められるとともに、エラーを検知するシステムが必要である。第二に、主体的な判断である。AI任せの社会とならないよう、人間による主体的な判断の機会を残すべきである。第三に、新しい職種・労働環境の創出である。AI活用により社会で必要とされる仕事の変化が予測されるため、新たな需要に応えるとともに、社員のリスクリングにも対応していく必要がある。最後に、AIリテラシー教育である。AIを利用可能な媒体が増えたとしても、利用者が正しいAIの活用方法を知らなければSNSでの誹謗中傷などの問題を引き起こす可能性がある。

AIを活用したより豊かな社会の構築に向け、これら4点が非常に重要であると考えている。

デジタルグループ感想

執筆者：石川 英昂、今野 翔太、佐々木 なつ、東海林 蓮、関口 風花

デジタルグループでは、ディスカッションに向けて各自で日本及び韓国の現状を調査し、準備を行った。月に一度ビデオ会議を開いて調査内容を共有し合うことで、互いの持つピースを重ね合わせていった。韓国青年との意見交換にとどまらず、どのような未来にしていくべきかといった一歩踏み込んだディスカッションを行いたいという気持ちが強くなった。具体的には、メンバーそれぞれで分担して教育、政治、メディア、インフラストラクチャーなどの分野に関する韓国及び国際的な状況を調査し、調査結果から推論できる考えや疑問点を洗い出し、順調に準備を進めていった。

初めに、現状に関する意見交換を通じ、医療現場においては韓国より日本の方がAI技術を導入していることが分かった。また、「AIに職を取られる」といった将来に対する悲観的なビジョンは日本青年と比べて韓国青年にはあまり見られなかった。その背景として、韓国では受験戦争が激しく、就職倍率もそもそも高いため、AIと職を奪い合う前に人間同士で競争しなければならないと捉えているのかもしれないと感じた。

また、ディスカッションをする前には、韓国青年は議論の場で物事をはっきりと伝えるイメージを抱いていたが、全ての人があるステレオタイプに当てはまるわけではなく、個人のバックグラウンドによって参加の仕方が異なっていた。どの韓国青年も、事前に調査した内容にかかわらず、その場の流れで個人の体験や経験を基に柔軟に議論しようとしており、その点は日本青年と異なるように感じた。実は、前提知識がなく話が進まなければ「次回までの宿題にする」という進め方が、アジア全体に共通する価値観だろうと予想していた。しかし、他の議論に移らずに目の前の議論に集中する姿を目にして、韓国青年は積極的なディスカッションスタイルであるという印象へと変化した。

最後に、今回のディスカッションでは互いの意見をまとめるプロセスの違いに難しさを感じた。議論したいトピックが多かったことから、どのトピックを取り上げるかという優先順位が日本青年と韓国青年では異なり、ディスカッション時間中だけでは事前準備してきた全ての内容を網羅することはできなかった。しかし、各トピックについて互いに率直に意見を出し合ったことで、建設的なディスカッションにすることができた。今回のディスカッションは、社会に出て国際的な場で議論し合う将来像を描く私たちにとって、有意義かつ貴重な経験となった。

分科会の概要

テーマ	メディア：日韓の報道比較から考えるメディアリテラシー
参加者	日本青年5名、韓国青年5名
トピック	・匿名報道と実名報道について ・メディアが社会に与える影響について

成 果

初めに、メディアグループのテーマである「メディアリテラシー」の定義を確認した。メディアリテラシーとは、メディアを能動的、批判的に受け入れて活用し、正しい情報を発信できる能力のことである。メディアリテラシーが、日本と韓国でどのように捉えられているか、①メディアリテラシーに関連する問題点、②その問題点に対する解決策、③解決策を踏まえた上で、今後期待できることの3点について主に議論した。

1. メディアリテラシーに関する問題点

メディアリテラシーに関する問題点として、大きく以下の三つが挙げられた。

第一に「フェイクニュース」である。フェイクニュースは、韓国では「偽りニュース」と呼ばれているという。例として、新型コロナワクチンに関するニュースなどがある。

第二に「模倣犯罪」である。例として少年犯罪が挙げられる。少年の犯罪やその内容がメディアによって詳細に報道されることで、他の少年も触発されて犯罪に走る可能性がある。

第三に「誹謗中傷」である。特に芸能人への中傷が話題に挙がった。

2. その問題点に対する解決策

次に、上記の問題点に対する解決策について、「個人」「企業」「社会（国家）」の3レベルで、日本側と韓国側の現状を踏まえながら意見を出し合った。

第一に、個人レベルでできることとして、次の二つが挙げられた。一つ目は、記事の出典である。二つ目は、フェイクニュースがもたらす影響の深刻性を認識することである。

第二に、企業レベルでできることとして、次の三つが挙げられた。一つ目は、SNSにおいて、会員登録前の利用登録テストを導入することである。二つ目は、フェイクニュースの制作者や、そのニュースを流布したSNSアカウント管理者などに対する利用規約の厳格化である。三つ目は、NAVER、YouTube、Googleなどのインターネットサービスを展開する企業に対し、メディアリテラシーに関連した情報などを定期的に表示することを義務化することである。

第三に、社会（国家）レベルでできることとして、次の三つが挙げられた。一つ目は、SNSに登録するときに、マイナンバーカードなどを利用した年齢確認を行うことである。二つ目は、サイバー犯罪に対応する行政機関の権限強化である。三つ目は、全世代へのメディアリテラシー教育の実施である。

3. 解決策を踏まえて今後期待できること

最後に、解決策を踏まえた上で、メディアリテラシーをより多くの人が身に付けることで期待できることについて、日本青年と韓国青年で共に考えた。大きく、以下の五つの展望が挙げられた。①傷つく人が減る、②真実を追求できる、③民主主義の支えになる、④犯罪同調及び間接的な加害の防止、⑤サイバーいじめの減少である。

上述のとおり、メディアリテラシーについて、日本側・韓国側それぞれの事例や青年個人の経験を踏まえながら、その問題点と解決策、それによって期待できることまで、一貫性と現実性を持ってディスカッションをすることができた。また、お互いの意見を尊重し合い、時間やテーマも常に意識しながら議論を進めることができた。

メディアグループ感想

執筆者：大内 星翔、梶原 芙花、松熊 心咲、村上 真惟、森山 裕香子

日韓で共通した社会問題に関して韓国青年と議論できたことは非常に価値のある経験であった。言語や国籍の壁を越えた活発な意見交換から始まり、発表も皆で一体となって作り上げることができ、グループとして絆を深められる時間であったと思う。日本と韓国それぞれの現状を共有した上で、問題解決に取り組むために具体的にどのような姿勢が必要なのか議論し、解決策のアイデアまで出し合えたのは大きな成果であったと考える。（梶原）

日韓両国の青年が参加したこのディスカッションの一番の良さは、メディアの報道の仕方やそれが青少年へ及ぼす影響に関して、両国の青年にとって互いに新鮮に感じる事例が多く挙げられていた点だ。一方で困難に感じたのは、「前提の共有」である。法律や文化など議論の前提となるものが異なるため、意見を伝える前に前提を共有しておく必要があった。限られた時間の中でそれにどこまで時間を割けるかを、議論を進めながら調整する難しさを感じた。（松熊）

通訳がいるとはいえ、言語の壁ありきのディスカッションに初めは不安があった。しかし、韓国青年たちは私たちの話を真摯に受け止め、韓国の現状や最新の情報を共有するとともに、ディスカッションのまとめにも大いに力を発揮してくれた。私は発表を一人の韓国青年とともに担当した。発表中はグループの皆が笑顔で応援してくれたお陰で、緊張しながらも堂々と伝えることができた。ディスカッションにとどまらず、真の日韓交流をすることができたように感じる。（村上）

本ディスカッションを通して得た一番の成果は、「自身の当たり前を取り払い、相手の話に耳を傾ける重要性に気付けたこと」であると考え。ディスカッションにおいて大切なことを、「言語の壁」によって再認識することができた。それぞれの制度や社会状況も異なるなかで、前提を確認し合い、理解し合うことの大切さも学んだ。（森山）

分科会の概要

テーマ	社会
参加者	日本青年5名、韓国青年5名
トピック	少子高齢化に伴う結婚観や子育て、伝統文化への影響について

成 果

両国で深刻な少子化の現状を共有し、若者の立場から意見交換を行うことができた。本稿では紙面の都合上、特に少子化に重点を置いて韓国青年との議論を行ったことを報告する。

1. 韓国での現状（韓国青年からの発表）

令和4年（2022年）のデータによると韓国の合計特殊出生率は0.78を記録し、以降減少の一途をたどっているという。韓国で深刻な少子化が起こっている背景として、①都市部（ソウル）における家賃の高騰、②都市一極化、③若者の経済的ひっ迫という3点について言及があった。加えて、韓国では「個人主義」の志向が高まっており、③の要因と相まって結婚する必要性を感じていない若者が増加しているとの指摘もある。特に、20代で結婚、出産、育児を経験することを難しいと感じる若者が多く、韓国における女性の初産時の平均年齢は33歳という情報も共有された。

次に、少子化に関わる韓国での対策及び課題について述べ。韓国で実施されている対策は、大きく二つに分けて考えられるだろう。一つ目は、出産休暇、出産費用の補助及び祝金、妊婦の労働に関する法律等といった、出産までの期間をサポートする対策である。そして二つ目は、育児休暇、保育サービス、二人以上の子供を育てている家庭への支援金、医療費の補助等、子育て期間及び第二子出産以降に充てられる対策である。いずれの対策も、男女ともに拡充されるよう整備が進められているというが、支援金の金額が十分でなかったり、会社によって育児休暇取得の雰囲気や差があったりするなど、課題も多く残っている。

2. 日本での現状（日本青年からの発表）

韓国同様、日本においても少子化が加速している。背景には、若者の非婚志向が高まっていることが大きく関わっていると考えられる。特に、家事や育児の負担や、仕事との両立を鑑みた際に、結婚や出産をしない選択をする女性が増加している。また、職場において育児休暇を取得しづらい雰囲気があることから、日本における男性の育児休暇取得率は17%と、とても低い。このような現状から、日本でも仕事と育児を両立することに難しさを感じる若者が増え、男女ともに非婚志向が高まり、少子化を招く要因になっているといえる。

次に、日本の少子化対策とその課題点について述べる。日本側が挙げた少子化対策は、上記の背景に基づき、働き方改革と育児休暇の2点であると考えられる。第一に、働き方改革が少子化対策において目指すことは、仕事と育児の両立を真に実現することである。しかし、長時間労働や不安定な雇用形態があることが、若者の結婚や育児への意欲を阻んでいると考えられる。第二に、育児休暇制度の課題としては、上記で述べたように育児休暇を取得しづらい雰囲気があるため、その制度を十分に利用できずにいるということである。更に、育児休暇を取得したことによる昇進の遅れや育児休暇取得期間の収入減少を心配することも、育児休暇の取得を思い悩む要因になっていると考えられる。

3. 上記現状を踏まえた上での意見交換の内容

両国の現状について報告があった後、互いに質疑応答の時間を設けた。まず日本側からは、韓国青年が言及する「多産・複数きょうだいがいる家庭への支援」について詳細説明を求めた。回答によると、韓国では複数の子供（2人以上）を産んだ家庭への支援が手厚くなってきており、例えば末っ子を対象にした教育費や生活費への補助が挙げられた。加えて、大学入試において、2人以上の子供がいる家庭では子供のうちの1人（大抵の場合は末っ子）が特別入試枠を利用して受験できる制度もあるとのことだった。これを受けて日本青年からは、「激しい大学入試競争がある韓国だからこそ、少子化と連携した対策が実現しているのではないか」「きょうだいが複数いるだけで特別入試枠が適用される制度は、日本では馴染みがないため斬新に感じる」という驚きの声も挙がった。

次に韓国青年から、日本青年が身近に少子高齢化を感じた経験にどのようなものがあるかという質問があった。回

答として、ある日本青年の地元では、少子化により統廃合する学校が増加していること、地方から都市に移住する人が増え、地域の伝統文化や祭りの継承者が減少していること等が挙げられた。

ここで、「伝統文化」を切り口に日韓でどのような取組みが行われているのかについて、個人の経験を基に話し合った。注目すべき点は、日本青年が口を揃えて「小中学校の校外学習等で伝統文化や地域文化に触れた経験があり、幼い頃から日本の文化と親しんできた印象を持っている。」と語る一方、韓国青年は「そのような経験は韓国では数えるほどしかない。」と話していたことである。両国青年はこれを踏まえ、①伝統文化を継承するためにはまず文化を「知る」ことが最重要であること、②全国の青少年を対象に伝統文化の学習機会を増加させること、③伝統文化への関心を高めるべく、現代の文化と融合し、人々が自然に受け入れられるような取組みを考える必要があることの3点で意見が一致した。

最後に、少子化が深刻さを増す一番の要因は何にあるのかについて意見交換を行った。ここでは、韓国の若者の間で広がっているという「個人主義」をキーワードに、両国青年の結婚及び育児に対する価値観を共有した。一人ずつ自分の価値観を話すことで、無論個人差はあるものの、国ごとに共通する特色がうかがえた。日本青年に共通するのは「自分のキャリアを築きながら20代後半から30代で結婚、出産をしたい」という点であり、この年齢に達した頃を一つのターニングポイントと捉えていることがうかがえた。一方、韓国青年は「自分の人生を大切にしたい」「自分の稼ぎは今いる家族に使いたい」と考えている傾向があり、結婚についても「生活に余裕があればしてもいいが、むしろ結婚を望んでいない。」と話す青年もいた。加えて、女性青年の中には「子供を産みたくない。」と答える人もおり、「子供は育ててみたいが、仕事をしながら育児をすることは難しい」と考えている男性青年もいた。これを受けて日本青年は、「韓国と比較すると、日本は子育てをする環境が整っているのかもしれない」と期待感を示しつつ、「偶然にも、今日ここに参加している日本青年の価値観がある程度類似しているが、日本の若者の間でも個人主義の考え方は十分に広まっていると思う」という意見も挙がった。

以上より、少子化が進んでいる要因として、若者が自分の人生において何を重要と考えているのか、その価値観の変化が大きく関係しているのではないかという結論に達し、意見交換を終了した。

4. 発表の内容

意見交換を踏まえ、発表用ポスターには、日韓における少子化の現状、背景、政策とその課題点について比較した上で、共に考えた改善策を記載した。全体発表では両国青年から一名ずつ発表者を出し、作成したポスターの内容を基にそれぞれの母語で順番に発表を行なった。

社会グループ感想

執筆者：白川 真帆

今回我々のグループでは、深刻な少子高齢化問題を抱える国同士としてその要因と解決策を中心に討論を行なった。

両国の現状の共有を通じて少子化を深刻化させている要因に共通したものがあることが分かった。それは、若者が経済的に余裕がないこと、そして、個人主義の傾向が強まり、結婚や育児より自身の人生をより大切にしたいと考えるようになってきていることの2点である。また、結婚や育児に関する支援や制度が不十分であることも分かった。関連して、結婚や育児に対する価値観をそれぞれ共有してみると、日本青年より韓国青年の方が結婚や育児に対して消極的で、自分の人生を大切にしたいと考える人が多かった。このことから、日韓で少子化が進む背景には共通点が多い一方で、日本に比べて韓国では結婚や育児をするには厳しい現実があることが分かった。事前準備で調査しただけでは知り得なかったことであるとともに、同世代でも置かれた環境によって価値観が異なることに気付かされる機会となった。

また、少子高齢化が伝統文化にどのような影響を及ぼすかについて話し合おうと考えていた。日本青年は事前調査する中で、少子高齢化が伝統文化の継承を妨げると推察していた。しかし、まずもって韓国では日本に比べて伝統文化に触れる機会が圧倒的に少なく、継承の必要性を共有できないことが分かり、前提条件から崩れてしまった。このようなことから、まずは伝統文化を継承していくためには幼い頃から「知る」機会を作るとともに、伝統文化を職業とする人を支援することも重要であろうという意見が挙げられた。日本青年は授業やクラブ活動、地域活動などを通じて幼い頃から伝統文化に触れる機会があったため、伝統文化は継承されるべきものであり、少子高齢化が継承を妨げる要因の一つになっていることを漠然と共有できていたが、背景が異なることで、少子高齢化によって連想される課題や問題も異なるということに気付くことができた。

最後に、両国の少子化と高齢化による伝統文化継承への影響に対する解決策を出し合った。少子化の解決策については、結婚や育児を望みやすい環境作りが必要であると考えた。具体的には、結婚や育児に関する十分な給付金が支給されることや育児休暇制度を取得しやすい環境が必要という結論で一致した。また、高齢化による伝統文化継承問題に対しては、日常生活に伝統文化を取り入れ、伝統文化に触れる機会を増やすことから始めると良いのではという結論で一致した。

全体を通して、両国の少子高齢化の現状を再認識できたとともに、我々が理想とする社会をどのように思い描き、どう作っていけば良いか、有意義な討論ができたと思う。特に、互いの結婚や育児に対する価値観を共有したことで、結婚や育児が自分の人生にどれほど影響を及ぼすか考えさせられた。生活するのに精一杯で、結婚や育児は現実的に難しいからこそ自分の人生を大切にしたいと考える若者が韓国には多いことが分かったが、日本青年も今後直面し得る状況かもしれない。同じ課題を抱える国同士としてこれから共に改善策を考えていけたら良いと考えている。